灰色の魔術師

ナリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灰色の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ１４２９Ｘ

【作者名】
ナリ

【あらすじ】
ある日起こった、第２王子の暗殺未遂事件。
新米魔術師のクロエはその犯人を追うが……
喰うか喰われるか、鬼畜な悪魔と少女のシビアな話。
＊公開設定に戻しました

恋の病　０１（前書き）

最後にイラストがあるのでご注意を

恋の病　01

「おはようございまーす」

職場である王国魔術師団・第3隊研究室（兼、執務室）に着くと、私は元気よく挨拶をして木の扉を押し開けた。

しかし、朝早いこの時間、中には誰もいない。朝早いと言えど、一応勤務時間5分前なんだけど……まぁ、いつものこと。魔術師には夜型な奴が多いから、1時間2時間遅刻は当たり前なのだ。

かく言う私も朝は苦手なのだが、1番に来て掃除をしておかないと上司に怒られるから仕方なく早起きしている。

「きったないなー。昨日も掃除したのに、1日で何でこんなに汚れるの？」

そこそこ広い部屋に、木製の大きな机と椅子が乱雑に並べられている。みんな壁際がいいとか窓の近くがいいとか言って、自分の好きなように机を動かしてしまうからだ。魔術師には自己中な奴も多い。

目の前の机の上には山積みになった資料や魔術書が置いてあり、奥の机には薬の入った瓶や調合に使ったであろう汚れたガラス容器などが散乱している。そしてふと右に目をやれば、正体の分からない紫の液体が板張りの床へとこぼれ落ちていた。

清潔に保たれているのは、私の机だけ。

深いため息をつき、ぞうきんを手に取る。私がやらなきゃ誰もやらないんだからと覚悟を決め、作業に邪魔なローブを脱いだ時だった。

ギィと音をたてて、背後で扉が開く。
入ってきたのは、私の所属する第3隊の隊長だった。立派な口ひげをたくわえた中年の男で、私が今脱いだものと同じ黒いローブを着ている。背中と左胸にこの国の紋章のついた、魔術師団の制服のようなものだ。

「あれ？　今日はお早いんですね、隊長。何かありましたか？」

隊長はすでに一仕事済ませてきたかのような、少し疲れた顔をしていた。

「何かありましたか、も何もーー」

『馬鹿と話すのは疲れる』と言いたげな口調。ここの魔術師たちのこんな態度にも、もう慣れた。
この国では、強い魔力を持っているのは貴族だけなのだ。庶民でも魔力を持つ者は多いが、魔術師になれるほどの力を持つ者は極めて稀。
で、その稀なのが私な訳だけれど、気高い貴族の皆様は、庶民と一緒に仕事をするのがお嫌なご様子。
17で入団試験に合格し、仕事を始めて半年が経つけれど、貴族の同期と比べて、あからさまに差別されることが多い。毎日の掃除だって私1人に押し付けられてる。
……まぁ、なんだかんだ言って、最近ではこの研究室を美しく磨き上げることに快感を感じちゃってるんだけども。
隊長は続けた。

「ーー大事件さ。おかげで私は夜も明けきらぬうちから呼び出されて寝不足だ。お前のような役立たずの下っ端がうらやましいよ」

さらっと付け加えられた嫌味を無視して、さらに問う。

「大事件？　何があったんです？」

「第２王子の暗殺未遂だ。昨夜、王子の寝室に何者かが侵入した」

「暗殺っ！？」

思わず声も高くなる。王子の暗殺だなんて……。

動揺しながら隊長につめ寄った。

「それで？　王子はご無事なんですよね」

隊長はうざったそうに私を押しのけると、自分の机に向かい、引き出しを漁り始めた。

「もちろんだ。犯人は王子が目を覚まされると、すぐに逃げたらしいからな。しかし警備の騎士が２人殺された」

「……。犯人の特徴は？」

「さぁな。王子は暗くてよく見えなかったそうだ。ただ、１人だけだったということは分かっている。おそらく単独犯だろう」

単独犯……。

隊長の言った単語に違和感を覚えた。だって王や王子の寝室には、優秀な魔術師たちによって、それなりに強力な結界が施されているはず。

その結界を１人で破ったっていうの？　この国えり抜きの魔術師たちが施した結界を？

私の頭の中に、ひとつの可能性が浮かんだ。

「まさか……犯人は”黒魔術師”ですか？」

恐る恐る聞くと、隊長もいつになく真面目な顔でうなづいた。

「おそらくな」

思わず息をのむ。恐ろしい黒魔術師がこの国の王子を狙っている、という事実に。

普通、魔術師というのは、生まれ持った自分の魔力を使って術を操る。そういう者たちは俗に”白魔術師”と呼ばれ、この王国魔術師団の人たちも皆そうだ。

一方で”黒魔術師”というのは、悪魔の力を借りて術を操る邪悪な魔術師たちのこと。

基本的に悪魔の魔力は人間のものよりずっと強いので、黒魔術師が扱う術も、とうぜん白魔術師のものと比べて強力になる。

悪魔と契約を結ぶ事は犯罪で、法で厳しく禁じられているが、力を求めて黒魔術師になろうとする者は後を絶たない。

「犯人は外部の者ですか？　それとも内部の？」

世界の中には、この国と敵対している国ももちろん存在する。だから暗殺者は外国の人間の可能性もある。

しかし王子の生死にはつねに権力争いも絡んでくるし、そうなると第2王子に生きていてもらっては困る、内部の人間の仕業ということも有り得るわけで……。

ひとり考えを巡らせている私に、引き出しの中から目当ての資料を見つけ出したらしい隊長は、

「そんなことお前は知らなくていい。役立たずは掃除でもしていろ」

と、冷たく言い放つと、そのまま研究室を出ていってしまった。

部屋に残された私は、むぅと眉間にしわを寄せながら、手に持ったぞうきんを握りしめた。
私のこと『役立たず』『役立たず』って言うけれど、今までここで魔術師として仕事をさせてもらった事なんてない。だから魔術師としての私の能力を、隊長は知らないはずなのだ。
だったら有能なのかと聞かれれば、自信を持って「うん」とは言えないけれども……。

だが少なくとも、掃除婦としての私は有能だ！
隊長への怒りで苛々としながらも、私は目の前の散らかった机を整理しにかかった。

＊＊＊

薬草の入った大きなかごを持ち、研究棟の湿った廊下を歩いていると、王族が住む城の方から正午を告げる鐘が鳴り響いてきた。有事の際にすぐ駆けつけられるように、魔術師や騎士の詰め所は城のすぐ隣にあるのだ。

（王子、大丈夫かなぁ）

窓から見える白亜の城を見つめながら、そんな事を思う。
犯人は警備の騎士を2人も殺した残酷な黒魔術師だ。目的を遂行するまで、きっと何度も王子を狙ってくるだろう。
”黒魔術師”という言葉を聞くたび、私の心はキリキリと痛む。
幼い頃の血濡れた記憶が、鮮明によみがえってきて……。
知らず食いしばっていた歯の力を抜くと、私は第3隊の研究室に向かって歩を進めた。他人の命を簡単に奪う黒魔術師のような存在

は、必ず根絶やしにしなければならない。そのために私は魔術師になったのだから。

「クロエ、ちょっと来て」

かごを抱えて部屋に戻った途端、横柄な口調で名前を呼ばれた。その声の主を見て、私は思いきり顔を歪ませる。

ースザンナだ。

「聞こえないの？　来てって言ってるでしょ」

若草色のドレスの上にローブを羽織った彼女は、多くの魔術師と同じく貴族であり、多くの魔術師と同じく庶民の私を見下していた。

他の人は一応、表面上はその感情を隠してくれるのだが、彼女は決して隠そうとはしない。キンキンと響く高い声で命令し、私のことをメイドのように扱うから、あまり好きな相手ではない。

「何か用ですか？」

私は薬草の入ったかごを机に置くと、仕方なく彼女の元へ向かった。栗色の巻き毛に、ぱっちりとした瞳。彼女は見た目だけなら可憐なお嬢様だ。

私より1年先輩の魔術師であるスザンナは、高飛車な笑みを浮かべながら、液体の入った小瓶をこちらへ差し出してきた。

「何です？　これ」

言いながらも、何となく予想はついていた。今まで何度か、同じような液体を飲まされた事があるから。

そしてその予想は、やっぱり当たっていたらしい。

「魔法薬よ。前にも飲ませたでしょ。あの時は失敗だったけど、今度はきっと上手く出来たから飲んでみて」

スザンナに薬を押し付けられ、しょうがなく受け取る。今、私の眉間には、恐ろしく深いしわが刻まれていることだろう。

この液体の正体は、飲めばねずみに変身できる魔法薬なのだ。

しかし私は決して、ねずみになりたいなどと思ったことはない。スザンナが勝手に作って、私に実験台の役目を押し付けているだけのこと。

（飲みたくない）

前に飲んだ失敗作では、体が毛むくじゃらになったり、しっぽが生えたり、出っ歯になったりと、ろくな事がなかった。今回だってきっとそうだろう。動物変化の魔法薬は作るのが難しいのだ。

しかしここで断ると、私への粘着がさらにひどくなるだろうし……。

「早く飲んでよ！」

スザンナが追い立てる。彼女は自分のストレス解消のために、私をいびっているように思える。だが、面と向かって「やめて」と言えない庶民の弱さよ。

この魔法薬を摂取しても死ぬ事はない……はず。

私は覚悟を決めると、小瓶に入った黄土色の液体をグッとあおった。

「うぅ……」

瞬間、そのまずさに吐きそうになる。
が、それを堪えて全てを飲み込むと、今度は強烈なめまいが私の体を襲った。ぐるぐると回る視界に思わず目をつぶると、途端に平衡感覚を失う。
ぐらりと上半身が揺れ、そのまま床に倒れ込んだ。

「？」

あれ？
派手に倒れたはずなのに、いつまでたってもやってこない衝撃に、私は恐る恐る目を開けた。

「……うん？」

見える景色がおかしい。
目の前には大きな茶色いブーツ。私はそのブーツの先を視線で辿り、顔を上げた。と同時に、「ぎゃあ」と叫び声を上げる。
そこにいたのは巨人スザンナ。どうやら今回の魔法薬作りは成功してしまったらしい。
つまり、私はねずみになってしまったのだ。
４足歩行に変わった自分の体を確認すれば、小さな胴体をくすんだ灰色の毛皮が覆っている。よりによってドブねずみ……。
軽い絶望を味わっている私の耳に、スザンナの高笑いが聞こえてきた。涙を流しながら、汚いねずみになった私を笑う。

「あはは、よく似合ってるわよ、クロエ！　最高！」
「笑ってないで、早く戻してくださいよ！」

人間の言葉を喋れたことが唯一の救いだ。私は上半身を持ち上げ

て、遥か遠くにあるスザンナの顔を睨みつけた。彼女はこうやって私をあざ笑うためだけに、この数週間、魔法薬の研究に取り組んできたのだろう。ご苦労なことだ。

「早く戻せ」と訴える私にスザンナが言ったことは、

「まだダメよ。薬の効果がどれだけ持続するか、あなたの体で試してちょうだい」

という無情な言葉。

私は声を荒げた。

「嫌ですよ！　何時間も戻らないかもしれないのに」

「知ーらない。他の人に見つかって駆除されないように、せいぜい気をつければ？」

スザンナは楽しそうにそう言うと、自分の机に座って鏡を出し、化粧を整え始めた。これ以上頼んでも、彼女は私を元に戻してはくれないだろう。

後ろを向いているスザンナに向かって小さな舌をべぇと出すと、私は扉の隙間から部屋の外へと飛び出した。４本の手足をちょこまかと動かしながら研究棟を出て、ひと気の無さそうな裏庭へと向かう。

この事態を打開するためには、『彼』の力が必要だと思ったのだ。

ーー強大な魔力を持つ彼の力が。

「こんな真っ昼間に、ねずみが散歩か？」

しかし、『彼』を呼び出す前に、思いがけず別の人間に捕まって

しまった。
細いしっぽをつままれて、逆さに体を持ち上げられる。
「しかも魔力を持ったねずみだ」
暴れる私に、疑いの眼差しを向けてくる人物。
陽光を受けてキラキラと輝く金髪に、薄いブルーの瞳。上等な外套を羽織ったその人は……
「エリク王子！？」
こぼれ落ちんばかりに目を見開き、かの人の名を叫んだ。
「怪しい奴だ。ねずみに化けて、こんなところで何をしている。まさかお前が、今日俺の寝所を襲った黒魔術師か？」
とんでもない疑いをかけられた私は、間近で見るエリク第2王子の端正なお顔に見とれながらも、「違います」「誤解です」と、必死に首を振ったのである。

＞i344491|1650＜

恋の病　０２

「誤解ですよ！」

しっぽをつままれ逆さになったまま、私は叫んだ。

「私、魔術師団・第３隊所属のクロエです。前に、エリク王子とお話させて頂いた事もあります」

「第３隊のクロエ……？」

王子はねずみの私を持ち上げたまま「クロエ……クロエ……」と記憶を辿っている。

そして数秒後。

「ああ、あの庶民の」

「そうです、あの庶民のクロエです！」

庶民で良かったと、この時ほど強く思った事はない。

話をした事があると言っても１回だけだったのだが、貴族の多い魔術師団の中で私の存在は珍しく、記憶に残りやすかったのだろう。

「で、そのクロエが何でねずみになっているんだ？」

そう問う王子にせつせつと事情を説明すると、「大変だなぁ」と同情してくださった。

「大変なのはあなたですよ。犯人の目星はついてるんですか？」

「いや、全然」

さらっと言って首を横に振るエリク王子。彼は王族だというのに、私みたいな庶民とも気軽に会話を交わす。
もちろん私だけではなく、貴族にも使用人にも、老人にも子供にも、魔術師にも騎士にも、誰にでも優しく平等。それゆえ、国民からの人気も高い。
だからこそ、こんな素敵なエリク王子が誰かに命を狙われているなんて、と思ってしまう。

「誰かに恨まれている、ということは？」

私のぶしつけな質問にも、王子はちゃんと答えてくれた。

「いや、分からない。自分で言うのもなんだが、俺って誰からも愛されるタイプなんだ。兄上と違って、人付き合い上手いし」

第1王子のサーディル様は誠実で寡黙、統率力があり頼れる存在だが、確かに少しぶっきらぼうで近寄りがたい感じがする。しかし未来の王としては、それくらいの方がいいのだろう。多少、威圧感のある方が。
一方で第2王子のエリク様は明るくて口がうまく、少しいいかげんなところはあるが、本人が言うように何故か皆から愛されるような、そんな存在だ。

「サーディル王子との仲も良好ですよね。権力争いなどもなく」

私は小さな黒い目を王子に向けた。
エリク王子はうなづく。

「ああ。俺は王の座になんて興味はないし、兄上との仲も良い」
「うーん、そうなるとますます犯人の動機が分かりませんね。エリ

ク王子を狙って得する人なんていないんですもん。敵国の刺客だとしても、王やサーディル王子を狙うでしょうし」

と、ぐたぐた考えているところで、ふと気がついた。

「そういえば王子、おひとりで何をされているんです！　護衛の方は？」

「暑苦しいから、まいてきた」

その答えを聞いて、私はふらりと倒れそうになった。王子にしっぽつままれたままだから、倒れられないんだけど。というか、そろそろ離してもらわないと、頭に血が……。

「たくさんの護衛に囲まれて息が詰まるのは分かりますが、きっとみんな心配してますよ。早く戻ってあげてください」

「そうだな。そろそろ戻るか」

エリク王子は素直にそう言うと、どこからか杖を取り出し、その先端を私に向けた。

《レドアンド・モレ》

彼が短く詠唱すると、杖の先から放たれた淡い光が私の体を包み込む。

そして次の瞬間には、

「も、戻った……」

私は人間に戻っていた。

「ありがとうございます。助かりました。エリク王子も魔術をたしなまれるんですね」
「ああ、魔術も剣術も一応はな。どっちも中途半端だが……」
と、そこまで言った後、王子は急に動きを止めた。じっとこちらを見つめてくる。
こんなかっこいい人に直視されたら、花の乙女である私はドキドキと胸を高鳴らせる事しかできなくなるではないか。
王子は私の瞳を覗き込みながら無邪気に言った。
「真っ黒な瞳っていうのも魅力的だな。幼く見えて愛らしいというか……。薄い色の瞳は、冷たい感じがするんだよなぁ」
「王子……」
私は呆れたように呟きながら、高鳴る心臓を落ち着かせた。王子は誰にでもこういう事を言うのだから。
しかし別に、王子が女たらしだと言っているわけではない。ただ彼は、素直に相手の良いところ、魅力的なところを口に出しているだけなのだ。
問題は、それをだれかれ構わずやるということ。
「王子、あなたのそういうところ素敵ですけど、気のない女性に向かって『魅力的』だとか『愛らしい』とかいうもんじゃないですよ」
「何でだ？　俺は別に悪口を言っているわけじゃない。誰でも褒められると嬉しいだろう？」
きょとんとするエリク王子は、少年がそのまま成長したような感じだ。確か私より年上だったはずだが。
この人は天然タラシだから始末が悪い。一体今まで、何人の女性を泣かせてきたのか。

王子は『黒い瞳って魅力的』だと発言しただけだが、言われた相手は普通、ちょっと違う風に受け取るはず。『エリク王子は”私の”黒い瞳を魅力的だとおっしゃったわ！　”私の”黒い瞳を！』ってな風に。

エリク王子は、素で相手に勘違いさせるような行動、発言をしちゃうんだよなぁ。

私はため息をついた。

「自分で考えて下さい。……あ、お迎えが来ましたよ」

研究棟の向こうから、護衛の騎士の皆さんが慌ただしくやって来た。王子の姿を見つけて、ホッとしたような顔をしている。

私は、しつこく「何故だ」と聞いてくる王子の背を騎士の人たちがいる方に押すと、

「もう護衛の人たちをまいたりしないで下さいね。黒魔術師というのは邪悪で恐ろしい奴らばかりなんです。本当に危険なんですから」

真剣な声で言う。

数秒間の沈黙の後、エリク王子が片眉を上げた。

「過去に黒魔術師と会ったことがあるような言い方だな」

私はぎこちなく笑って、肩をすくめた。

「両親が殺されたんです」

「王子！　探しましたよ！」

「こんな時におひとりで行動なさるなんて、何を考えていらっしゃるんです」

小さく呟いた私の言葉は、王子を”捕獲”しに来た騎士たちの喧噪にかき消された。
しかし王子にはしっかりと聞こえていたみたい。何とも言えない表情をした後、「それは辛かったな」とこぼして、そのまま騎士たちに連行されていく。

（言わない方がよかったかな）

遠く離れていく王子を見送りながら、そう思った。優しいエリク王子には、言うべきではなかったのかも。情が厚いから、しばらく私の事を気にしてしまいそうだ。
しかし言わなければ言わないで、あらぬ疑惑を持たれそうだったし。

冷たくなった両親……破壊された村……。
勝手に浮かび上がってきた血濡れの記憶を脳みその奥底へと沈めると、頭を振って気を取り直した。
今こそ、私は頑張らないといけない。
私は世に潜む黒魔術師を倒すために、魔術師になったんだから。

（けど隊長は、新人で庶民な私に仕事を回してはくれないだろうな。ましてや、王子暗殺未遂の犯人を追うなんて重要な仕事）

研究棟に入ると、廊下を進んで部屋へと戻る。
が、扉を開けた途端、仁王立ちして待ち構えていたスザンナに激しく睨みつけられた。

「？」

一体、何をそんなに怒っているのだろうと首をひねる。勝手にねずみから姿を戻した事？
誰か通訳してくれないかと部屋を見回してみるが、ほとんどの隊員は暗殺未遂事件のほうで出払っていて、残っているのは3人だけ。
すなわち私とスザンナ。そしてダンという名の若い男だけなのだ。

「いい気にならないでよ」

蛇に睨まれた蛙のごとく、その場で立ちすくんでいた私に、スザンナが低い声を出した。

「エリク様はアンタの事なんて何とも思ってないんだから！」

そう叫ばれて初めて、先ほどの裏庭でのやり取りを見られていた事に気づく。
しかしもちろん、エリク王子が私の事を何とも思っていない事も分かっている。

「庶民のくせに、エリク様と話をするなんて」

憎々しげに言われた。
どうやらスザンナは、エリク王子の事が好きなようだ。それもすごく。
そういえば、遠くにエリク王子の姿を見つけると、「私のエリク様……」とか言ってうっとりしていた姿を何度か目撃している。ただ、うっとりしていたのはスザンナだけじゃなかったが。
”王子”という地位と甘いマスク、そしてその天然タラシ能力の効果で、エリク王子が嫌いな女性なんていないから。本当に罪な人だ。

「もう二度と、彼と話さないで！」
「そんな事言われても……」
スザンナの強い口調に、私はもごもごと反論した。
「この敷地内を歩いていれば、稀に王子にお会いする事もありますし……。向こうから話しかけられたら、無視する訳にはいきませんよ」
「口答えしないでっ！」
ヒステリックに叫ぶと、スザンナは机の上にあった分厚い魔術書を手に取り、こちらに向かって投げつけてきた。
「わわっ！」
間一髪でそれを避けるも、スザンナの攻撃は止まらない。積み上がっていた魔術書を、上から順番にぶつけてくる。
「痛っ……！　ちょっ……待っ」
分厚いそれは立派な凶器だ。肩やお腹にガンガンと投げつけられ、私はなす術なくその場に座り込んだ。
「ほんとムカつく！　どうしてアンタみたいな汚い庶民がエリク様に話しかけてもらえるのよ！」
研究室にスザンナの金切り声と、私の体に本がぶつかる鈍い音が響き渡る。
『庶民』は本当のことだからいいけど、『汚い』と言われるのは嫌だな。ーーなんて事が考えられるほどの余裕も、しかし次の瞬間に

は無くなった。
怒りで顔を真っ赤にしたスザンナが、机の上に置いてあった透明なフラスコ瓶に手を掛けたからだ。
「ま、待って、スザンナ！　落ちつーー」
身の危険を感じた私は、魔術でシールドを張ろうと、太ももにつけていたホルダーへ咄嗟に手を伸ばした。そこに杖を差していたから。
しかしこの場合、さっさと体を起こして逃げるか、腕で顔を守ったほうがよかったのかもしれない。
杖をとるも防御は間に合わず。あらん限りの力で投げつけられたフラスコ瓶は、ノーガードだった私の額へとブチ当たってしまった。
「……っ！」
瞬間走った鋭い痛み。
私の石頭があだになったらしく、当たった刹那にフラスコ瓶は砕けたのだ。額の皮膚が切れ、とろりと流れ出た血が右目をふさぐ。
粉々に割れたガラスが、カラカラと高い音をたてて床に落ちた。
額からの血が顎までつたい、ポタポタと床に染みをつくっていく。これだけ派手に流血したら、普通、攻撃を加えた方は「やりすぎた」と正気に戻るはずじゃないだろうか。
しかし、痛みに顔をしかめている私に向かって、スザンナは尚も追撃の手を休めない。今度は杖を持ち出して、長い呪文を唱え始めた。
彼女は嫉妬に捕われて、我を失っているように見えた。目が完全にイっている。しかも今唱えているのは、それなりに強力な攻撃呪文。ちゃんと発動すれば、私ごとこの部屋が吹っ飛ぶほどの威力が

出るはず。
私がちょっとエリク王子と話したからといって、いくらなんでも嫉妬し過ぎだ。恋する乙女の暴走は恐ろしい。

「スザンナ、落ち着くんだ」

と、そこで彼女を止めてくれたのは、部屋に残っていたもう1人ーーダンだった。不細工でもなければ美しくもない顔に、低くもなければ高くもない身長の、少し地味めな青年。
彼も貴族で普段私には冷たいのだがーーというかほとんど興味が無いようで、話しかけられたこともないーーさすがにこれはやばいと思ったようだ。杖を掲げているスザンナの手をがっちりと掴んで、「もうやめておけ」と説得している。できればもう少し早く助けに入って頂けると、非常にありがたかったのだが。

いさめられたスザンナは、憎悪のこもった瞳できつくこちらを睨みつけた後、「フン！」と鼻を鳴らして部屋を出ていってしまった。
私はまだ誰かを好きになったことはないけれど、恋をしたら皆あんな風になってしまうのだろうか。意中の相手を想うあまり、嫉妬して、憎んで、攻撃して。

（いや、まさか）

自分の疑問を自分で否定した。スザンナはちょっと、いき過ぎている。

「大丈夫かい？」

2人残った部屋の中、ダンが私に声を掛けてきた。それに「いや、大丈夫じゃない」と答えると、彼は杖を持ってこちらに近づいてき

て、

《ア・デナレオ》

呪文を唱えた。

途端に患部が温かくなって、じんじんとした痛みが消えていく。

どうやら、額の傷を治してくれたみたい。

意外と良いとこあるなと見直した。普段そうでもない人に親切にされると、相手がすごく優しい人に見えてくる不思議。

「隣の材料庫に新品のガーゼがあったから、顔拭いておきなよ」

しかしダンはそう言うと、何事も無かったかのように自分の机に座り、仕事に戻った。片目のふさがった私の代わりに、ガーゼを取ってきてくれる優しさはないらしい。

だが、まぁ、怪我を治してくれただけありがたい。私はゆっくりと立ち上がると、血に濡れた右のまぶたを閉じたまま廊下に出て、隣の材料庫へと向かった。材料庫と言っても、空き部屋を利用した、ただの物置なのだけど。

汚れた木の扉を開けて、物置の中へと入っていく。

しかし、ふと窓際に目をやったところで、この部屋にいるもう1人の人物に気がついた。

「あ……」

宙に浮かび、見えない椅子に座って足を組んでいる男。

完璧に整った顔に陶器のような白い肌。頭には渦を巻く角があって、濃い金色の髪は窓からの日差しを受けて艶めいていた。そしてその真紅の瞳は、まるで呪われた宝石のように妖しい色気を宿して

いる。
人間離れした美しさを持つその男は、私の血まみれの顔を見て愉快そうに口元をゆるめ、こう言った。
「おいで。傷を見せてごらん」

恋の病　０３

「傷はもう治してもらったから大丈夫」

私は宙に浮かぶ金髪の男ーーミカリエに向かって、親しげに話しかけた。

ミカは唇の片端をつり上げると、含みを持った口調で言う。

「そう。お前がいいのなら、私もそれでいいよ。お前がいいのならね」

「何……？」

彼の楽しそうな顔を見て不安になった。過去の経験から言うと、ミカがそういう顔をしている時は、何か私にとって楽しくない事が起きている時だからだ。

そろそろと窓際に近づいていくと、宙に浮いていたミカは、ふわりと床に降り立った。彼が動くと、魅惑的な甘い香りが辺りに広がる。

「何なの？」

血に覆われていない左目で、背の高いミカをキッと睨みつけた。彼相手に弱気でいくと、どんどん足元をすくわれるから。

ミカはその整った顔に恐ろしく綺麗なほほ笑みを浮かべると、何もない空間から、突然鏡を取り出した。金の装飾が施された高そうなもの。ミカは何も言わず、その鏡を私の顔に向けた。

「うわ、すごい血ーーって……ん？」

顔の右半分を覆う血の量に一瞬驚いたが、その後、傷があったであろう額に目をやって私は硬直する。
ダンは確かに、傷を治してくれていた。皮膚は塞がり、血は止まっているから。しかしーー

「何これ？」

思わず、眉間にしわを寄せる。
なぜなら私の額に、小さな出っ張りがあったからだ。まん丸ではなく、少し角張っている。
何でいきなりこんなものが出来たのかと思ったが、しかし考えてみれば思い当たる節があった。

「砕けたフラスコのガラス……」

おそらく、私の額の傷には小さなガラス片が刺さっていたのだろう。で、それを取り除く事なく、ダンが傷を治した。血で見えなかったのか、はたまた私なんかの傷にはそれほど注意を払っていなかったのかは分からないが、結果、皮膚がガラスを覆ってくっついてしまって……

「最悪」

思わず悪態をつく。埋まったガラス片を取り除くには、くっついた皮膚をもう1度切らなければならない。2度も痛い思いをしなければならないなんて。
これなら最初から自分でやった方がよかった。

今日は厄日だ。

泣きそうになりつつポケットから小型の折りたたみナイフを取り出して、その刃を消毒しようとした時だった。
突如こちらへ伸びてきたミカの手に顎をつかまれ、くいと上を向かされる。ガラスの埋まった私の額に、彼の細長い指が近づき……そしてすぐに去っていった。

しかし彼が何をしてくれたのか、私には分かる。呪文の詠唱も杖も無かったけれど、ミカは魔術を使ったのだ。カラン、と軽い音をたてて床に落ちたガラス片が、それを証明している。
もう1度鏡を覗き込むと、血に濡れてはいるものの、傷痕も出っ張りもない綺麗な肌を確認する事ができた。

「ありがとう」

ガラスを取り除いてくれたミカにお礼を言うと、彼の妖艶な笑みは、より深くなった。
それにしてもすごい。皮膚を切る事もなく、私に痛みを感じさせる事もなく、埋まったガラス片を一瞬で取り出し、肌をきれいに治すなんて。

「どうやったの？」

一応魔術師の端くれである私としては、興味を持たずにいられない。
ミカは低くなめらかな声で答えた。

「患部の神経を麻痺させてからガラスの欠片を空間移動で取り出し、治癒をしただけ」

何でもないことのように言うけれど、それはかなり難しいことだ。

神経をいじるには、かなり緻密な魔力のコントロールを要求されるし、ガラス片を転移させる空間移動術も簡単な技ではない。しかもそれを杖なし、呪文なしでやるのだから。
ミカの力の凄まじさは、もう十分わかっているつもりだったけれど、やはり見るたび驚いてしまう。
彼にとって魔術を使うということは、呼吸するのと同じくらい簡単なこと。魔力の量も膨大で、人間にとっては難しい術や不可能な術でも、なんなくやってのける。なぜならミカはーー

「クロエ」

と、その時。
背後で静かに扉が開いた。
顔をのぞかせ、私に声を掛けてきたのはダンだ。
彼が廊下を歩いてくる足音に気づけなかったので、ダンが扉を開けた瞬間、驚いて飛び上がりそうになった。
唯一開いている左目でダンを見た後、ミカのいた方にそわそわと視線を戻す。しかし私が心配するまでもなく、彼の姿はこの部屋からこつ然と消えていた。
密かに胸をなで下ろした後、もう1度ダンを見て質問する。

「どうかしましたか？」
「さっきのことだけど……スザンナに怪我させられたって、あまり周りに言わないでやってくれるかな。スーはちょっと興奮してしまっただけなんだ」

若干動揺している私の様子に気づくこともなく、ダンはたんたんと話した。
スザンナのことを『スー』と呼んだことが気になったけど、すぐに、そういえば2人は幼なじみだったと思い出す。スザンナとダン

の実家は距離的にも身分的にも近く、仲が良いのだと聞いたことがあるのだ。スザンナがうちの隊長に話していたのを、なんとなく聞いていただけだが。

「ええ、元から言いふらす気はありませんし」

「よかった。頼んだよ」

それだけ言うと、ダンはすぐに去っていってしまった。怪我は治っているとはいえ、顔面の半分が血まみれの女子が目の前にいるのだから、もうちょっと気に掛けてくれてもいいんじゃないか？

そんな事を思いつつ窓の方を振り返ると、ダンが来る前にいた位置に、ダンが来る前と変わらない様子でミカが立っていた。

自分の姿しかり、何かを透明にする魔術も結構難しいはずなんだけどなぁ。

「対価を」

うずたかく積み上げられた荷物の中からガーゼを探そうとした時、突然ミカがそう言って、手のひらを差し出してきた。

ー対価。それは私がミカに何かをしてもらうたび、必ず払わなければならないもの。彼は、私の傷を治した対価を求めているのだろう。でも……

「さっきのは、親切でやってくれたんじゃないの？」

口をとがらせて言う。「治してくれ」と、私から頼んだわけではない。

しかしそんな理由では、彼は納得しないのだ。

ミカの薄い唇が、ゆるく弧を描いた。

「私に親切心などというものがあると思っているの？」

そう言われたら、降参するしかない。ミカにそんなもの有りはしないのだから。

私は肩を落とすと、目の前の妖美な男に尋ねた。

「わかったよ。何が欲しいの？　またトリム酒でいい？」

ミカは大抵、対価にそれを望む。トリムという赤い果実から作られる高級酒を。

だが今回はトリム酒でなく、『ここ』にあるもので我慢してくれるらしい。

ミカは音もなく私に近づくと、真っ赤な舌をぺろりと出して、

「今回はこれでいい」

と、私の頬をつたう血液を舐めた。

「血っておいしいの？」

わき上がった単純な疑問。ミカに顔を舐められながら質問すると、彼は喉の奥で低く笑った。

「お前のはね」

＊＊＊

日暮れを告げる鐘が鳴る頃、私はひとり、とぼとぼと家路をたどっていた。第2王子エリク様の暗殺未遂事件のことで、とうぜん城の警備は騎士・魔術師とわず増やされたわけだが、私はそれから外されたから。

エリク王子を守るため、憎き黒魔術師を倒すため、自ら「私も頑張ります！」と立候補してみたんだけど、「まだ新人のお前に、こんな大事は仕事は任せられない。城の備品を盗むかもしれんしな」と、隊長に……あのヒゲ親父に言われたのだ。奴の嫌味は日常茶飯事なため、大人な私は普通に無視をしてやった。いくら庶民出身の貧乏人でも、城のものを盗ったりはしないっつーの。

ちなみにスザンナの方も、私の事を完全無視することに決めたらしい。あの後から、一切話しかけてはこなかったから。

「ただいま」

一人暮らしの部屋には誰もいないのだけど、「ただいま」と言うのは習慣になってしまっている。

私が今住んでいるのは、城の近くにある女性用の寮だ。

騎士の場合は、貴族の者でも庶民の者でも、最初はみんな同じように寮で共同生活を送るのだという。そうやって信頼関係を作っていき、結束を固めるのだ。

しかし魔術師の場合は違う。数十人が一緒に戦うということは滅多にないので、協調性を養うための寮生活は強いられない。

なので私以外の魔術師たちは、馬車に乗って実家の屋敷から通っているものばかり。地方に住む者はわざわざ王都に別邸を買うものもいるし、貴族と言えども別邸を買う余裕のないものは、特別に許可を取り、転移の術を使ってやって来たりもする。

この寮も本来は女性騎士たちのためのものなのだが、部屋が余っていたので私も入れてもらったのだ。

私が育った実家も、村も、今はもう無いから。

すっかり日も落ち、辺りに濃紺の闇が広がると、私はそろりと寮を抜け出した。後ろにはミカもついて来ている。
彼はずっと私の側にいるわけではない。基本的に呼べば姿を現してくれるのだが、日中は一人で”散歩”しているらしい。どこへ行っているのかは分からないが、大体想像はつく。
小さな諍(いさか)いであれ、どこかの国で起きている大きな戦争であれ、怒り、恐怖、悲しみ、嫉妬、人間の負の感情が集まるところに、彼らも集まるから。

《デェアトロ・レア・アグナーザル》

寮の裏手へやって来ると、辺りに人がいないのを確認してから、小さな声で呪文を唱えた。ー持っていた杖を、自分の方に向けて。
詠唱が終わると同時に、私の体はゆっくりと透き通っていく。
その変化に、私は術の成功を確信したが、しかし完璧にとはいかなかった。半透明になったところで、術の効力が失われてしまったからだ。これでは他人に見つかってしまう。幽霊だと思われるかも。
慣れない術だから、まだ練習が足りなかったみたい。それに自分自身に術をかけるのは、他人に術をかけるより難しいのだ。
私は諦めて、解除の呪文を唱える。すると半透明の体は、またゆっくりと鮮明になっていった。

「ミカ……」

困った表情でミカを見上げると、彼はこうなることを予想していたかのように口角を上げて笑い、私に向かって手のひらをかざした。

そのすぐ後。

「もういいよ」

艶やかな声でミカが言う。闇をまとったミカは、その姿を見慣れている私でも、思わず見とれてしまうほど美しい。彼はよく、黒髪黒目の私のことをカラスの雛のようだと言ってからかうけれど、私がカラスならミカは孔雀だ。

「え？　本当にこれで見えなくなってる？」

自分の体を見下ろして聞いた。他人から姿を隠すため、透明になる魔術をかけてもらったはずなのだけど、私の体は一向に透き通る様子がない。

「お前の姿も私の姿も、今は他人には見えていないよ」

「そうなんだ」

ミカがそういうのなら、そうなんだろう。彼の術は完璧だから。今までたくさんの魔術書を読んできたけれど、人間が使うものの中に、こんな術は存在しない。私やミカ、特定の者には姿が見えているのに、その他の者には見えない術なんて。

普通、透明になる術といったら、自分にも自分の姿が見えなくなるものなのだ。

「対価を」

ミカから、お決まりのセリフを言われた。

「後でトリム酒あげるから」

顔をしかめながら答えると、ミカは目を細めて、それを了承した。

恋の病　０４

ミカがかけた術によって、私の姿は他人から見えなくなった。それと同時に声も聞こえなくなっているらしい。
が、地面を歩く足音や衣擦れの音は周りに聞こえてしまうと説明されたので、私は極力音を消して、そろりそろりと城へ向かった。
私なんかがエリク王子を守らなくても、他の人たちが警備をしっかりやってくれているのだが、犯人が黒魔術師である可能性が消えない以上、私も出しゃばらずにはいられない。

対黒魔術師の戦闘に関しては、私はきっと誰よりも経験を積んでいる。王国魔術師団に入る前から、ミカに協力してもらいつつ、密かに黒魔術師を倒してきたから。
そしてここー王宮魔術師団に入団したのも、黒魔術師の情報が集まりやすいのではと思ったからだった。自分一人で情報を集めるのは限界がある。

「ここでいいかな」

王子を狙って、また今晩やってくるかもしれない暗殺者ー黒魔術師を迎え撃つため、私は王城の敷地内、西門の側までやってきた。
昨晩、黒魔術師はここを通って、王子の寝室へ向かったはず。殺された騎士たちの遺体が、犯人が辿った足跡を示してくれたのだ。昨日ここで警備をしていた騎士は、２人とも亡くなっている。殺す必要があったのかは分からない。
犯人は人の命を軽んじているのだろう。黒魔術師とは、大体そういうもの。

私は音をたてないように気をつけながら西門の近くにある大きな木の幹によじ登り、その太い枝に腰掛けた。ミカはふわりと浮いて、私の隣に腰をおろす。

門の警備は通常2人なのだが、今日は4人いる。城の敷地内を見回っている騎士たちの姿も確認することができるが、もちろん向こうはこちらに気づいていない。

木の枝に座っている私とミカの姿は、本当に彼らには見えていないのだ。自分では自分の体がはっきりと見えるだけに、なんだか不思議な感じがする。

昨日の今日で、また犯人がやってくる可能性は低い。しかし犯人が一刻も早く王子を殺したがっているのなら、警備が強化されている事を分かっていても来るだろう。

自分の力に自信を持っているであろう黒魔術師なら、なおさら。

しばらく私は、じっと黙って周囲に気をはらっていた。いつ姿を現すか分からない黒魔術師に備えて。

そうしてすっかり夜も更けた頃、それまで暇そうにしていたミカが突然口を開いた。

「いつまで続ける？」

その言葉の主語は、『この監視を』だろうと思った私は、前を向いたまま短く返す。

「もちろん、朝まで」

暗殺者とは、たいてい夜に動くものだ。犯人の姿を隠すこの闇が晴れるまで、私は見張りを続けるつもりだった。明日も朝から仕事だけど、まぁ頑張るしかない。

今夜は徹夜覚悟だ、という私の気持ちを悟って、ミカは何やら考えるような仕草をした。そして、ぱっと手のひらを上に向けると、次の瞬間には、そこに白い陶器で出来た小さな入れ物が乗っていた。

私もよく知っているその容器には、顔や体に塗るクリームが入っているはず。普段、就寝前の私にそのクリームを塗るのが、ミカの仕事だった。

誓って言うが、別に私が「塗ってくれ」と頼んでいる訳ではない。むしろちょっと嫌がっているのに、ミカが勝手に塗りたくってくるのだ。

彼は何故か美容に厳しく、ずぼらな性格の私が肌や髪の手入れを怠っていると本気で怒ってくる。静かにキレられるのだ。

しかし、いくら注意しても私の態度が改善しないので、今ではミカが勝手に全部やってしまう。私の体なのに……。

「ちょっと、やめーー」

正面を向いていた私の顔を、ミカがぐいっと自分の方へ向けた。そうして手に取った乳白色のクリームを、私の顔面に塗りたくってきたのだ。

寮を出る前にお風呂には入ってきたけれど……今日はもう、クリームいいじゃない。私まだ10代だし、1日欠かしたくらいでは劣化しないよ。

そんな事を思いながら、傍若無人なミカに訴える。

「今日は、んぐっ……もういい……んむ」

が、クリームを塗ってくるミカの手に邪魔されて上手く喋れず。

このクリームは塗った後もべたべたせず、ほんのり花のいい香りもするから私も気に入っているのだけど、こんな乱暴に塗られるのは嫌だ。

しかしミカを止めるもの難しい。彼は自分の望みのままに生きているから、私が「嫌だ」と言っても聞かないだろうし。第一に、私の意見なんて取り入れる気がないのだ。

「もう……」

私は早々に諦めて、ミカの好きにさせる事にした。どこかで黒魔術師の気配がしないか、襲われた人間の悲鳴が聞こえないかと警戒しながら。

＊＊＊

（あれ？　私あれからどうしたんだっけ？）

夢と現実のまどろみの中で、ぼんやりとそんなことを考える。意識はだんだんと覚醒していき、まぶたに映る朝日を感じて飛び起きた。

「……朝っ！？」

見慣れた部屋。寮の自室だ。そして私が乗っているのは、使い慣れた古いベッド。

部屋の中にはミカもいて、宙に浮かんで優雅に足を組み、グラス片手に血のように赤い液体ートリム酒を飲んでいた。

「あれ？　私……」

頭を抱えて記憶を掘り起こす。昨夜、木の上でミカがクリームを塗り出した事は覚えている。確かその後、三つ編みにしていた髪も解かれて整えられたはずだが、その辺りから記憶がない。
髪をすくミカの手つきが優しくて、すごく気持ちよかったような……。

「まさか私、髪とかれてる途中で寝ちゃった？」

ミカを見上げ、確信を持って聞いた。黒魔術師を倒すぞと意気込んでいたのに、張り込みの途中で寝てしまうなんて。くそう、不覚。
ミカはグラスの中のトリム酒を飲み干し、にやりと笑って言った。

「眠ったお前を私が運んであげたんだよ。対価を貰いたいところだが、今回は大目にみてあげる。魔力は使っていないから」

彼の言い草に、私はムッと眉根を寄せる。

「対価をもらいたいのは、こっちだよ！　勝手に人の顔にクリーム塗りたくってきたり、頼んでもないのに髪梳かしてきたりしてーー」
「その頼んでもない行為で、気持ちよくなって眠ってしまったのは誰だった？」

そう言われて、私はぐぬぬと黙り込んだ。
ミカは私を言い負かしたことに満足したような笑みを浮かべると、グラスとトリム酒の入った瓶を持ったまま消えてしまった。おそらく、”本来彼がいるべき世界”に一時的に帰ったのだろう。
ミカは朝の真っ白な日差しが苦手らしく、通常この時間帯はほとんど引きこもっているから。

しばらく彼が消えた辺りを見つめていた私だが、ハッと我に返る

と、急いで身支度を整えた。
昨晩、私が眠ってしまった後で黒魔術師が来ていたらどうしよう、と思いながら。

しかし心配は杞憂だったらしい。
魔術師団の研究棟へ向かう道すがら警備の騎士に聞いてみたが、何も異常はなかったとの事だった。
ホッと息をつくと同時に、これは長期戦になるかもしれないと思った。エリク王子の殺害を諦めていないなら犯人はまたやって来るはずだが、それが1週間後か1ヶ月後かは分からないのだ。

＊＊＊

で、何事もなく2週間が過ぎた。予想通りの長期戦に突入。
私は相変わらず、隊長の判断によって、1度も夜の警備には加わらせてもらえなかった。なので初日と同じく、一人で密かに張り込みを続けていた。
しかし日中仕事ーー内容は掃除と雑用だがーーを抱えている中で、夜も徹夜で張り込みをするのは体力的にキツい。睡眠不足でへろへろになっているところへ黒魔術師が現れたら、きっとまともに戦えないし。

そこで私は、途中から夜の張り込みをミカに頼むことにした。もちろんその日ごとに、対価のトリム酒を渡して。
トリム酒は高く、毎日渡すたびに私のお給料が確実に飛んでいくのだが、他に手段が無いから仕方がない。

（だいたい、実際にミカが張り込みにいく訳じゃないのに）

私の代わりに城の警備に行ってくれているのは、蛇だ。いつもはミカの腕に巻きついている黄金でできた蛇が、ミカの意志によって、まるで生きているかのように動き出すのだ。

そしてミカは、その蛇に張り込みに行かせているというわけ。自分は動かず。

もちろん、蛇はミカの魔力で動いているという事は分かっているけれど、私の寮の部屋の中で悠々としている彼に対価を払うのは何だか釈然としない。

「クロエ」

その日の夕方、仕事を終えて研究室を出ようとした時だった。隊長に突然、声をかけられた。

「お前も今日の警備に加われ。外回りだ」

隊長が私に掃除と雑用以外の仕事を回すなんて、珍しいこともあるものだ。私は軽く目を見開いた。

「いいんですか？　私も加わって」

「人が足りないから、お前のような役立たずでも使わなければ仕方がない。周りの足を引っ張るなよ」

突き放すように隊長が言う。どうやら、長期戦の影響が出始めているらしい。厳戒態勢が続く中で犯人がなかなか現れず、みんな疲れてきているのだ。

特に魔術師は、騎士の１０分の１ほどしか人数がいない。その少ない人数で毎夜の警備を回しているから、へばる人だって出てくる

だろう。最近は日中に居眠りしている隊員も出てきたし、隊長の目の下にも青いクマができている。
で、その疲れきった隊員に休息を与えるために、私が引っ張り出されたのだろう。
でも理由は何でもいい。この魔術師団に入ってから、まともな仕事を与えてもらえたのは初めてだから、ちょっと嬉しかったりする。

日が暮れ、城の警備についた。私に割り当てられたのは外の見回りだったので、裏庭にあるだだっ広い植物園を、見学がてらウロウロと歩き回った。今日は私がこうして起きている訳だから、ミカ（の蛇）には城の監視を頼んでいない。
しかし広い植物園だ。王族の人たちが楽しむため、庭園のように整えられているところもあれば、端の方では何の華やかさもない薬草が大量に栽培されている。
ヤケドによく効くものに、切り傷に効果があるもの、解熱の作用があるもの。栽培されている葉っぱの働きを、頭の中で順番に言い当てていく。
魔術師団に入る前には、山でとった薬草を売って生計を立てていたから、結構詳しかったりするのだ。
園をぐるりと回って異常がないことを確認した後、他のところを警備しようと、木でできた柵を開けた時だった。

「魔術師のクロエだな？」

暗闇の中で背後から突然声をかけられて、私は「ひぃ」と情けない声を上げてしまった。バクバクと脈打つ心臓を押さえて後ろを振り向くと、腰に剣をたずさえた騎士が一人、手に持ったランプを高くかかげて、こちらを照らしていた。

「は、はい……。私はクロエですが」
「エリク様がお呼びだ。警備はいいから、ついて来い」
それだけ言ってさっさと歩いていってしまった背の高い騎士のあとを、私は慌てて追いかけた。エリク王子が私に一体何の用だろうかと、首をひねりながら。

恋の病　05

「おお、来たな」

初めて入った王族の部屋。

きらきら輝くシャンデリアに、繊細な調度品の数々、床には植物の文様が描かれたじゅうたんが敷かれてあり、寮の私の部屋とは比べものにならないくらい豪華だ。ほんと……悲しくなるくらい。

東の壁には寝室へ続いているらしい扉があり、南側一面には分厚いカーテンが引かれていたが、その先にはきっとバルコニーがあるのだろうと思われた。

王子は中央に置かれたソファーに座り、私に向かって軽く手を挙げている。

「あ、どうも」

足を踏み入れるのにも勇気がいるような、庶民な自分には場違いな部屋を目の当たりにし、私は完全に萎縮していた。汚れたブーツでこのじゅうたん踏んだら、怒られるだろうか？

「何してるんだ。早く入って来い。聞きたいことがあるから、ちょっと座ってくれ」

「あ、はい」

恐る恐る足を踏み出す。じゅうたんを踏んでも怒られなかった。ふぅと息をついて王子の元へ向かう。王子というより、その周りの人たちが怖いんだよな。

眼光鋭い護衛の騎士たちに、私の事を品定めするような目で見て

くる侍女たち。みんなエリク王子を守ろうとしてるんだろうけど、私そんなに怪しい者じゃないんです。一応この国の魔術師なんです。

「失礼します」

低いテーブルを挟んで王子の向かいに座ると、王子は「大事な話だから」と人払いをした。侍女たちはお茶を出してくれた後に退室したが、騎士たちは反対する。

「王子、いつまた犯人がやってくるとも分からないのですよ」
「大丈夫だ。クロエが魔術を使って撃退してくれる」
「その者はまだ新人のようですが……」

幼さの残る私の顔を見て、銀色の髪をした騎士が不安そうに言う。こんな近くで王子の警護をしているということはエリートなのだろう。きっと剣の腕も立つはずだ。

私は王子に聞いた。

「人払いが必要な話なのですか？」
「お前の故郷の話だ」

エリク王子の表情が真剣になる。

「……だったら、人払いは必要ないですよ。別に聞かれても困りませんから」

聞かれても困らないけれど、あまり喋りたくない話題ではある。しかし王子の前で口をつぐむ訳にもいかないから、私はしょうがなくそう言った。

２人の騎士を部屋に残し、その他の護衛を外に出した後で、王子

は静かに話し出した。

「この前、お前言ってただろ？　両親が黒魔術師に殺されたって」
「はい」
「それがちょっと気になってな。調べさせてもらった」

ため息をつきたくなった。やっぱり『両親が殺された』だなんて、王子に言わなければよかったかも。エリク王子は今大変な時なのに、私の事で時間を取らせてしまったようだ。

「わざわざお調べにならなくても、聞いて頂ければ答えましたよ」
「まぁ、暇だったんだ。最近は城に籠りっぱなしで」

王子はゆるいほほ笑みを浮かべて、肩をすくめる。そしてテーブルの上に置かれた資料を見ながら、話を続けた。

「これは１２年前にサハスという村で起きた虐殺事件の報告書だ。事件が発覚したきっかけは一人の少女だった。１２年前の１０月。トトポリという田舎町の私警団の詰め所に、幼い少女が助けを求めてやってきた。数人の団員が少女に訴えられるがまま、彼女の家があるという隣村……サハスへ向かうとーー」

王子が、私の反応を伺うようにこちらを見た。

「村の住人全員、飼われていた家畜までもが一匹残らず殺され、その死体があちこちに転がっていた。ある者は腕が飛び、ある者は首が取れ、土には血がしみ込んで赤黒くなっていた。この世の地獄のようだった、と、この報告書には書かれている」

ひらひらと、王子が紙の束をふる。私は目を伏せて、ただ話を聞

いていた。やだなぁ……
王子はまた、資料に視線を戻す。
「村人たちを殺したのは見知らぬ黒魔術師だ、と、少女は説明した。幼い彼女もその時この場にいたのだが、隠れていたから殺されなかったらしい。その後サハス村には他の私警団員や騎士たちが派遣され、周辺を探しまわったが、村民を虐殺した黒魔術師はとっくに逃走しており、捕まえることはできなかった。そして唯一の生き残りである少女も、村人たちの埋葬が終わった後に、こつ然と姿を消してしまった」
王子の空色の瞳が、じっと私を見据えてくる。
「少女の髪と瞳は黒く、年齢は5、6歳。……これはお前だな？」
「……はい」
素直にうなづく。私には他人に教えられない秘密が1つあるけれど、これはその秘密とは違う。教えたって、別に問題はない。
私の答えを聞いて、王子も静かにうなづいた。扉の近くに立っている護衛の騎士の表情に、私に対する同情の色が浮かぶ。
「どうして事件の後、姿を消したんだ？」
王子の声音は、私を責めるようなものではなかった。
「もう、そこに留まる理由がなくなったからです。事件のことや犯人のこと、私が目撃した全ては騎士の方たちにお話ししましたから。それに事件のことを思い出してしまうので、村の近くにいるのは辛くて……」
「……そうか。では、その後、お前は一人でどうやって生きてきた

んだ？」
「町の食堂なんかで配膳の手伝いをさせてもらったり、山で採った薬草を売ったりしながら、いろんな町を転々としていました」
私の説明に、王子は目を丸くした。
「まだ子供だったお前が、よく無事に生きてこれたな」
「はい。危ない目にも合いましたけど……まぁ、なんとか」
そう言って苦笑する。実のところ、サハス村を離れた時点で私にはミカがいたから、今日まで無事に生きてこれたのだ。そうでなければ、とてもじゃないけど一人では生活できなかった。さらわれて、他国にでも売られてたんじゃないだろうか。
王子は私の過酷な半生に呆れたような、それでいて感心したような顔をすると、気を取り直して喋り出した。
「だが、１２年前の虐殺事件の生き残りが、今も無事でいてくれてよかった。かなり大きな、そして衝撃的な事件だったが、未だに犯人を捕まえられていないからな」
ぺらぺらと資料をめくりながら、王子は続ける。
「お前は唯一の目撃者だ。犯人のことで覚えていることはないか？例えばこの報告書によると、犯人の男はーー」
エリク王子の言葉をさえぎり、私が引き継いだ。
「犯人の男は４０代くらいで細身。茶色い髪をしていました。目立った外見的な特徴は無く、どこにでもいそうな男です。服装はしっかりしていて、清潔感がありました。もしかしたら貴族かもしれま

せん。犯人が私の住むサハス村を訪れたとき、彼はまだ黒魔術師ではありませんでした」

ほとんど息継ぎをしないで、流れるように喋り続ける。

「犯人の男はまず最初に私の家を訪れ、抵抗する間を与えずに両親を殺しました。父と母は悪魔や黒魔術師のことを専門に研究していたのですが、男は両親が集めていた資料をあさり、悪魔を召還する魔法陣を見つけ、その場で悪魔を呼び出したんです」

忌まわしい過去を語っているというのに、私の声は自分でも驚くほど落ち着いていた。

「悪魔と契約を結び黒魔術師となった男は、その力を試すために村人を殺し始めました。私は家の中に隠れていましたが、村人の悲鳴と男の笑い声はずっと聞こえていました。そして辺りが静かになった頃、私は家から這い出し、この村で起きた惨劇を目の当たりにしたんです。犯人はすでにおらず、私は助けを求めるため、急いで隣町に向かいました」

絶対に言う事のできない一部分を除いて、真実を話した。

「でもこれらの情報はすでに、12年前に私警団の方や騎士団の方にお話ししてあります。犯人に繋がりそうなことは全て。ですから今、私が新たに提供できる情報は無いんです」

「何でもいいんだ。サハス村の虐殺は、国内でも有名な事件になっている。国の安定のためにも、凶悪な黒魔術師の情報が欲しい。今、捜査は手詰まり状態だから」

王都から遠く離れた小さな村で起きたことを、エリク王子がこん

なに気にかけてくれるのが嬉しかった。他に犠牲者を出したくないという思いからだろうが、それは私も同じ。しかしーー

「エリク王子……私も犯人には早く捕まってほしいですから、できる事なら何でもします。でも、時が経つにつれて記憶は薄れていく一方で、新たに思い出すこともありません」

そこで私は1度目をつぶった後、顔を上げて正面に座っている王子を見つめた。

「犯人のことで何か気づいたことがあれば、またお話ししますから、今日はもうこの話はやめて頂けないでしょうか。私まだ……整理がついていないんです。優しかった両親や……村の人たちが殺されたこと……」

自分の手のひらをぎゅっと握る。蘇ってくる凄惨な記憶を、私は頭の中で1つずつ打ち消していった。こんなところで取り乱す訳にはいかないから。

エリク王子はゆっくりうなづいた後、優しい声で言った。

「わかった。嫌なこと聞いて悪かったな」

「いいえ」

私は気持ちを切り替えて、にこりと笑った。

「でも、まずはエリク王子を襲った犯人を捕まえなくちゃですね。黒魔術師の数はそう多くないですから、一人一人倒していけば、いつか私の両親を殺した犯人に当たるかもしれません」

「ああ、そうだな」

そう言って、エリク王子もそっとほほ笑む。彼には、ミカとはまた違った魅力がある。ミカが陰なら王子は陽。王族なのに傲慢なところがなく、思いやりがあって、明るく爽やかで優しい。
だけど彼を見てると、私は時々辛くなる。ーー自分がものすごく汚れた人間に思えるから。

エリク王子に挨拶をして、私は足早に部屋を出た。王子はこれから少し仕事をした後で眠るらしい。
ついさっきまで王子としていた話題を引きずりながら、暗い顔をして黙々と廊下を歩いていると、進行方向によく目立つ”孔雀”が立っていることに気づいた。
ミカだ。

彼は片方の口角を上げて笑いながら、じっとこっちを見つめてきた。私は何も言わずに、視線も合わさずに彼の横を通り過ぎる。すぐ後ろにミカがついてくるのが分かった。
階段を降りていく時に侍女らしき女性とすれ違ったけど、彼女にはミカの姿が見えていないらしい。何の反応もしなかったから。

「何なの？」

苛々しながら聞いた。振り向いて確認はしないけど、ミカはさっきからずっと笑っているような気がした。ただでさえ、私は今、気分がよくないのに。

「お前があの人間としていた話」

闇に溶けるような声で、ミカが話し出す。
姿は見えなかったけど、近くで聞いていたらしい。『あの人間』

とは、エリク王子のことだ。
私はぐっと眉に力を入れると、後ろを振り返ってミカを睨みつけた。そうするとミカは、さらに楽しそうに笑って言う。
「『時が経つにつれて記憶は薄れていく一方で』……？」
それはさっき、私が王子に言った言葉だ。故郷の村で起きた事件について、私の記憶はだんだんとあいまいになっていく、と。
「それは嘘だろう」
疑問系ではない。ミカは確信しているのだ。
「あの時の光景は、お前の脳裏に強く焼き付いているはずだ。今でも、夢にみるくらい」
意地悪な表情をして言う。
確かに悪夢をみることはある。そうしてハッと目を覚ますと、たいていミカはベッドの側で愉快そうにほほ笑んでいるのだ。
ミカは私を守ってくれるし、力を貸してくれる。しかし、完全に私の味方というわけではない。私が精神的に苦しんでいると、ミカはいつも優しく頭を撫でてくれるが、同時に、最高に楽しそうな顔をしているのだ。
”彼ら”はそういう生き物なのだと、今では諦めているけれど。
「うるさい」
私は背の高いミカを睨み上げると、それだけ言ってプイと顔を背けた。唇を噛みながらきびすを返し、また前に向かって歩き出す。
こういう時はさっさと切り上げてしまったほうがいい。彼との口

論で勝ったためしは無かったから。
負け犬のごとく逃げ出した私の後ろを、ミカは再びゆっくりとついてきた。たぶんまだ笑ってる。

王族の居住区を抜け、城を出る。これからまた、警備の仕事に戻らなくてはならない。しかし、私は隊長から具体的に警備の場所を指示されたわけではなかった。ただ、「お前は外だ」と言われただけなのだ。
さてどこへ行こうかと思案していると、ふいに視線を感じた。殺気を感じてぞわりと背筋が粟立つほどの、強い眼差し。
ミカが後ろで、フフと声を出して笑う。

パッと左へ顔を向けると、庭の手前を横切る外回廊の柱の影にまぎれて、白い人影が浮かび上がった。
一瞬、城に出ると噂されている、昔殺された侍女の幽霊かと思って悲鳴を上げそうになる。黒魔術師や悪魔は全然怖くないけれど、幽霊はちょっと怖い。
しかしその正体はもちろん、幽霊などではない。

私を射殺さんばかりの勢いで睨みつけながら、スザンナが大きな足音を立ててこちらに近づいてきた。

恋の病　０６

「スザンナ？」

近づいてくる人物を半ば呆然と見つめながら、ぽつりと言った。彼女は今日、夜の警備の担当ではないはず。普通なら家に帰っている時間だが……

「どうしたんです？」

質問してみたが、スザンナはそれに答えなかった。私の目の前までやってくると、こちらを激しく睨みながら言う。

「どこへ行っていたのよ」

その問いの意味がいまいち理解できず、私はただ黙ってスザンナを見つめた。眉間にしわを寄せ目をつり上げている彼女の顔は、暗闇の中で見ると怖さ倍増だ。歯を剥き出して、今にも噛みついてきそう。

「どこへ行っていたのかと聞いているの！　今、城の中から出てきたでしょ！？　それもエリク様のお部屋がある方から！」

何も言わない私にしびれを切らしたのか、スザンナはいきなり大きな声で怒鳴り始めた。私のすぐ後ろにはミカがいるのだけど、やはり他の人には見えていないらしい。

「この女、お前に嫉妬しているね」

私の耳元に顔を寄せ、愉快そうにミカが言う。しかしそんな事、私だって分かっている。素直に「エリク王子とお話してきました」なんて言ったら、本当に殺されかねない。スザンナの形相はそれくらい凄まじかった。恋する乙女の顔ではないよ、これ。

「えっと……ちょっと用事があって……確かにエリク王子のお部屋の近くには行きましたけど、会ってませんよ」

「本当でしょうね！」

スザンナはこちらにずいっと顔を近づけ、続ける。

「あんたみたいな庶民はエリク様と話す権利もないんだってこと、よーく覚えておきなさいよ！」

人差し指を突き立て、怒りで血走った目を剥きながら、吐き捨てるように言われた。私が言い返さないのを確認すると、高飛車に鼻を鳴らして西門の方へ去っていく。

その後ろ姿を見送りながら、そういえばスザンナは西門を利用してるんだな、と漠然と思った。家があっちの方にあるんだろう。

エリク王子を襲った黒魔術師が通ったのも西門。警備の騎士が２人殺された場所。

彼女はエリク王子にのめり込んでいる。ほとんど話したこともない相手を、どうしてそれほど好きになれるんだろう。

今のスザンナは危険だ。何をしでかすか分からない。

……いや。もう、しでかしているのかも。

「ミカ……もし彼女に悪魔が憑いていたら、ミカには分かる？」

後ろにいるミカに問いかける。

「ああ、分かるよ。だが教えてやらない。それじゃ面白くないから」

私が仏頂面で振り返ると、ミカは真紅の瞳を三日月のように細めて笑った。このやろうめ。

スザンナがエリク王子を襲った黒魔術師だと考えるのは短慮すぎるだろうか。自分に振り向いてくれないエリク王子、他の女のものになるならいっそ……なんて考えるのは。

うーん……。今のスザンナならやりかねないけどーーなんせ、この間は、同僚（私）に攻撃魔術を喰らわせようとしたのだ。普通なら懲罰もの。

しかし一方で、彼女に悪魔を召還する度胸が、王子を殺す度胸があるだろうかとも思う。でも、カッとなったら勢いでやっちゃいそうだしなぁ。

私がうんうんと唸っていると、

「なんだ、きみか」

後ろから強い光を当てられた。

杖の先に光を灯したダンだ。

彼はスザンナと違って、私と同じく今日の夜の警備当番だ。今も外を見回っていて、暗闇で唸っている不審者を警戒したらしい。

「今、スザンナと会ったよ。こんな時間まで何してたんだろう」

不審者が私だと気づいた途端、興味を無くしたようにきびすを返すダンに、そう声をかけた。彼はスザンナの幼なじみだ。彼女について詳しいはず。

「ああ、さっきまで僕と話してたんだ。彼女最近恋に悩んでるから、相談に乗ってたんだよ」

淡々とダンが話す。彼は基本的に無表情だし、あまり感情を表に出さない。ダンとスザンナを足して割れば、ちょうどいい感じの人間が生まれそうなのにな。

「恋の相談……エリク王子のことだね」

私は納得してうなづいた。その相談が終わりダンと別れ、ちょうど帰ろうとした時、スザンナは私が城から出てくるのを目撃したに違いない。城の出入り口はたくさんあるが、私が出てきたところは王族の居住区に近いところだったし。

ダンはちらりとこっちを見て、肩をすくめた。

「そうだよ。ついこの間、スーは王子に振られたんだ。それで落ち込んでる」

「振られた？　ってことは告白したってこと！？」

思わず叫んだ。スザンナってば何を考えているんだ。

好きな人に告白すると言っても、相手が王族では簡単にいかない。告白するチャンスがあったとしても、普通は相手の立場をおもんばかって遠慮するはずだが。

「スーは普段から、むりやり用事をみつけては城に入ってたんだ。エリク王子に会うために。それで、ちょうど1ヶ月くらい前かな。スーが泣いて僕のところに来て……。城の廊下でエリク王子とすれ違ったらしいんだけど、勢いで想いを伝えてしまったって……それで振られたって号泣してた」

ダンは警備を続けるため、辺りを歩き回りながら静かに説明した。私はその一本調子な声を聞きながら、彼の後をついて回る。ミカはさらに遅れて、後ろからついてきた。

しかしスザンナは突拍子もないことをする。きっと王子の周りには護衛の人たちがたくさんいただろうに。よく「無礼者」と放り出されなかったな。

まぁ、エリク王子がそんなことはさせないか。

でもスザンナは貴族と言えども下級貴族で、王族よりも庶民の方に近い立場だ。

「こっちを見てほほ笑んでくれた王子を見て、『好きだ』っていう気持ちが抑えられなくなったんだって。昔からスーは素直な子なんだ」

眠そうな目で辺りを探りながら、ダンが言う。

スザンナが素直……。自分の気持ちに正直だという点では、確かに素直だけど。でも、どちらかと言えば自己中心的の方がしっくりくるなと思った。心の中だけで。

そしてエリク王子にも文句を言ってやりたくなった。だれかれ構わずほほ笑みかけるなんて、あんた自分の顔のよさを分かってるのか、と。

「ダンはスザンナと幼なじみだよね。スザンナはいつからエリク王子のことが好きだったの？」

「昔からだよ。スーの父親も魔術師だったから、城で開かれる建国祭の舞踏会に呼ばれてたんだけど……8つの時かな、それに初めてスーもついていったんだ」

杖先の光がダンの顔を明るく照らし、頬のそばかすを浮かび上がらせた。私が言うのもなんだけど、ダンって顔立ちが地味だよなぁ。私が言うのもなんだけど。

「そこでエリク王子と少し会話を交して、恋に落ちたらしい。帰ってきてから大変だったよ。『あの人が私の王子さまよ！』って興奮しちゃって」

普段はあまり喋らないダンだけど、幼なじみのことになると饒舌になるようだ。もう少し突っ込んで聞いてみた。

「最近、スザンナちょっとおかしいと思わない？　ダンから見て、どう？」

「確かに少し、情緒不安定だね。王子への想いが届かずに落ち込んでるんだよ、かわいそうに。スーは１０年以上も、一途にエリク王子のこと想ってきたんだ」

スザンナのことを話すダンの声音には愛情がにじんでいた。私の目にはわがままに見えるスザンナの性格も、ダンの目には素直で天真爛漫に映っているんだろうか。

話が終わると、私はダンと別れて警備を続けた。

今の私の考えとしては、スザンナがエリク王子を襲った黒魔術師だという可能性が1割。他に犯人がいる可能性が9割ってとこだろうか。

だってもしスザンナが犯人だったとしたら、その動機は『失恋』だということになる。振られた腹いせに殺そうと思ったのか……。

だけど恋をしたことのない私には、失恋しただけで相手を殺そうと思う心理が分からない。家族でもなく、血のつながりもない相手をそこまで想うなんて……私にはきっと一生、理解できないんじゃ

ないだろうか。
ーーそれはそれで、寂しいけれど。

夜通しの警備のかい無く、その日も犯人は現れなかった。東の空に太陽が昇りはじめてから、私は警備を交代してもらって寮に帰り、そして午後には研究室へ仕事に向かった。午前中は休めたけれど、まだちょっと眠い。
お金の問題でそろそろミカにトリム酒を献上するのもキツくなってきたので、今夜は自分で見張りに行こうと思っていたのだが、この状態だと途中で寝てしまいそう。
しばらく睡眠を取らなくても大丈夫！　っていう魔術があればいいのに。

仕事を終えて寮に帰る。部屋に入ると同時にミカを呼び出した。

「ミカ」

一言声をかけるだけで、彼は何も無い空間からゆっくりと姿を現した。切羽詰まった私とは反対に、余裕のある表情。
私が何も言わないうちから、ミカが口を開く。

「金がないんだね？」

すべて見透かされていた。
下手にとり繕ってもミカには効かない。私はいさぎよく認め、うなづいた。

「もう今月のお給料すっ飛んじゃったよ。今日もミカに城の見張り

を頼みたいんだけど、対価はトリム酒以外のものにしてほしくて……。できればそんなに高くないやつ」

トリム酒は貴族の間ではよく飲まれているお酒だけど、それほどいいお給料をもらっていない私が１０本も２０本も買うとなると、かなり厳しい。

貯金はまだいくらか残っているけど、もしもの時のため、これ以上は使いたくない。

「かぼちゃパイとかじゃダメかな？　甘くておいしいよ」

ご機嫌を伺うように言ってみたけど、ミカは薄く笑っただけだった。つまり、「話にならない」ってこと。

「じゃあ、ミカは何が欲しいのか言ってみてよ」

私が開き直ると、ミカはこういう展開になると分かっていたような、悠々とした口調でこうのたまった。

「私が今欲しいものに金はかからない。こちらへおいで、クロエ」

何となく嫌な予感がして、二人掛けの小さなソファーに腰をおろしたミカの後を、私は追わなかった。黙ってつっ立っている私に、ミカがすっと指先を向けてくる。

と同時に体がふわりと宙に浮いた。「わわっ」と慌ててみても、空中ではどうにもならない。ゆっくりと私の体は移動していき、気づくとミカの膝の上に座っていた。ほんと、ミカの力って反則だ。

「なにするつもり？」

獲物を前に舌なめずりでもしそうなミカを見て、私は小さく震えた。
ミカの紅い瞳は興奮を押し殺したように妖しく輝いていて、薄い唇は大きく弧を描いている。目を奪われるほど美しく、凶悪で、そして最高に楽しそうな顔。

「なにするつもりなのか言ってよ」

戦々恐々として言う。
ミカが私を殺すことはない。絶対に。それが分かっていても恐ろしい。
なぜなら今の彼の表情には、嗜虐心がありありと浮かび上がっているからだ。思わず泣きそうになる。

「何なの？　腕を引き千切ったりしないよね？」

自分の体をきつく抱いた。

「そんなくだらない事はしないよ。いいかいクロエ、今からする事に耐え、私を楽しませてくれるのならば、私もお前のために働こう。この国の王子を襲ったという黒魔術師を倒すまで、無償でお前に協力するよ」

恐怖に震える私の反応さえ、ミカは楽しんでいるようだった。彼の甘ったるい声は脳を溶かし、私の思考能力を奪っていく。

「痛いのはいや」

小さくかすれた声で懇願した。怖いけれど、黒魔術師を倒すのにミカの協力は絶対に必要なのだ。

「痛くはないよ。ーー肉体的にはね」

ミカは猫なで声でそう言うと、うつむく私の頭を両手で覆った。
ぐらり、脳が揺れるような感覚。私はぎゅっと目をつぶる。
途端に真っ暗だった頭の中で、あざやかな映像が再生され始めた。

ーーこれは記憶だ。
忌まわしい、私の過去の記憶。

恋の病　07

必死で頭の底に押し込めてきた記憶が、勝手に掘り起こされていく。

私はミカの意図を察し、抵抗しようとした。

「やめて、いや……」

暴れたくても体に力は入らず、まぶたも開かない。弱々しく抵抗の言葉を吐きながらも、脱力してミカに体を預けることしかできなかった。

「封じた記憶を解いてごらん。お前はあの日のことを忘れてはいないし、記憶は薄れていないだろう？」

私に残酷なことをしようとしているミカの声は、ひたすら甘く優しかった。

彼は私にあの日のことーーあの虐殺事件のあった日のことを、詳しく思い出させようとしている。きっと、私が王子に『時が経つにつれて記憶は薄れていく一方で……』なんて話した事への当てつけだ。それが嘘だと知っていて。

ろくな抵抗もできずに、私の意識は過去の記憶と混同していった。

懐かしい風景が見える。私はひとり、実家の裏庭に立っていた。

いや、ひとりではない。庭には、幼い頃の私もいた。短い手足を一生懸命に動かして、井戸の水をくみ上げている。

山の中腹にあった私の村は、周りを広大な自然に囲まれていた。

しかし高い木は生えておらず、あるのは豊かな草原ばかり。景色がよく、遠くには雄大な山々が見える。
私の実家も含め、ぽつぽつと見える家々はほとんど木とレンガで出来ていて、温かくも、質素でこじんまりとした造りだ。
１００人にも満たない人口より、飼われているヤギの数の方が多いような田舎村だった。

まるで夢の中にいるみたい。１２年前に離れたっきり村には戻っていないのに、目に映る景色は妙にあざやかでリアルだ。芝生の緑は、より濃くはっきりとした緑で、太陽の光はより明るい黄色。

そっと足を踏み出して、両親がいるであろう家へと近づく。キッチンの窓から中を覗くと、狭いリビングに母の姿が見えた。濃い茶色の豊かな巻き毛、優しげな顔立ち。お気に入りだった白いエプロンをつけて椅子に座り、やぶれた服を繕(つくろ)っている。

（お母さん……）

こみ上げてくる涙をぐっと堪えた。彼女は今、生きている。
だけどもうすぐ死ぬ。これはあの日の記憶だから、その結末は変えられない。変えられないのに、それをまた見なければならないなんて……
現実の私が苦しげにうなり、ミカの服をきつく握りしめた。
見たくない。しかしミカの術のせいか、どうしてもまぶたを開ける事ができないのだ。

母を見ているのが辛くなり、私はもう1度、過去の私がいる方へ視線を向けた。
すると小さな私は、水の入った桶を持ちながら、じっと山裾の方を見つめていた。

ーー”やつ”が来たのだ。

私もくるりと振り向いた。ふもとの方から、一人の男が山を登ってくる。身なりはきちんとしているが、眼鏡をかけていて顔立ちは平凡。どこかの貴族のおじさん、というのが、やつを見た第一印象だった。

貴族がこんな田舎へやってくることは珍しいが、当時の私にはそれほど驚くことでもなかった。

父、母ともに黒魔術師や悪魔の研究をしていて、若いながらもその分野では名の知れた人たちだったから、王都から偉い人がやって来ることも何度かあったのだ。

この村に住み始めたのは私が生まれてからだったらしく、それまでは王のもとで研究にいそしんでいたのだとか。

父はただの研究員で、魔力はなかった。しかし母は落ちぶれた貴族の末裔で、魔術師になれるほどではないが、多少の魔力は持っていたらしい。暖炉の火をともす程度の簡単な術なら、母はよく使っていたから。

私の魔力は母譲りなのだ。

”やつ”はどんどん近づいてくる。

幼い私は水桶を置くと、そっと家の影に隠れた。方向的にうちへ来るのは分かったが、見知らぬ人に話しかけ、案内をかってでるほど気さくな子供ではなかったから。どちらかというと人見知りで、引っ込み思案だったのだ。

男が一人でいることに、この時の私は小さな違和感を覚えていた。今まで都からやってきた人たちは、みんな従者だったり荷物を乗せた馬だったりをつれていたのに、それがないから。

男は従者どころか、何も荷物を持っていなかった。片手に持った地図と、腰にたずさえた杖以外は。

幼い私は、男の持っている杖に気づいて目を輝かせた。このころの私は白魔術師になるのが夢だったからーーしかし生まれ持った私の魔力では、魔術師にまでのぼりつめるのは難しいことも分かっていたけどーー男が魔術師だった場合、なにか術を教えてもらえないだろうかと期待したのだ。

もちろん、杖を持っているからといって魔術師であるとは限らない。私の母だってそうだ。

だが私は母以外に魔術を使える人を知らなかったので、何だか妙に嬉しくなって、らしくもなく、自分から男に声をかけてみようかと思ったりした。

しかし家の前までやってきた男の表情を見て、急に不安を覚える。

わき上がる期待と興奮を、無理矢理に抑えつけているような男の顔。自然と漏れる笑みを隠そうとして唇は変な具合に歪み、たれ気味の目はらんらんと光っている。

山を登ってきたせいか、それとも興奮のせいか、男は肩を上下させて荒い息をついていた。だが、うちの玄関扉の前までやってくると呼吸を整え、仮面をかぶるようにして穏やかな表情をつくりあげた。柔和な紳士の表情を。

男が扉をノックする。今の私は思わず、やつに飛び掛かりそうになったが、そんな事をしても両親を助けられるわけではないと思い留まった。ここは私の記憶の中。未来は変えられない。

玄関に近いリビングにいた母は、すぐに扉を開けた。見知らぬ男を見て、やわらかな声で「どちら様？」と訪ねる。

男がそれになんて答えたのかは、幼い私には聞き取れなかった。ただ、にこにこと笑う男の姿を不気味に思った事は覚えている。

男が母と話しているうちに、小さな私は裏口から家の中へ入っていった。裏口はキッチンに続いていたので、そこからそっとリビングの方を覗く。
今の私も、過去の私の後を追って室内に入った。
“その時”が近づいてる。

しばらく玄関で立ち話をした後、母は父を呼びに奥の書斎へと向かった。おそらく男が、父を呼んでほしいと頼んだのだろう。
母がいなくなった途端、男の顔に勝利を確信したような笑みが浮かんだ。手に持っていた地図を捨て、腰にたずさえた杖を取り、背中の方に隠した。
魔術を使う者がその手に杖を取るということは、騎士が剣を抜くのと同じこと。今の私なら即座に魔術を使ってその杖を奪おうとするけど、幼い私にそんなことできるはずもない。ただ息を潜めて、奇妙な訪問者が帰ってくれるのを待つだけだった。

家の一番奥は書斎になっており、壁一面に立てられた本棚には、父と母が集めた黒魔術師や悪魔の文献がところ狭しと詰めこまれていた。机の上や床にも資料が散乱していて、いつ行っても足の踏み場がなかったことを覚えている。
母はその書斎から父を連れて戻ってきた。少し長めの黒髪はいつもボサついていて、かけている丸眼鏡は野暮ったいものだったけれど、私にとってはかっこいい父だった。顔のつくりは割と整っていて爽やかだったから、もっとおしゃれすればいいのにと子供心に思ったものだ。
懐かしい父と母。しかし2人はこの後すぐにーー

「行かないで……行っちゃだめ！」

我慢できずに叫び、玄関に向かおうとする両親の前に立ちはだか

った。
が、それには何の意味もなく、２人は私の体をするりと通り抜けていってしまう。
私は顔を歪ませ、ぎりりと歯を噛みしめた。両親を止められないのがもどかしい。憎い男が目の前にいるのに、この手で殺せないことが悔しい。

「なにか？」

玄関にいる男に近づきながら父が聞いた。

（だめ……だめ……）

男は黙って、父が自分の目の前にくるのを待っていた。まるで獲物に飛び掛かるタイミングを計っているよう。
何も言わない男へいぶかしげな視線を送りながら、父が玄関までやってくる。母もそれに続いた。

（だめ）

小麦の入った大きな袋の影に隠れている小さな私。その横で、今の私は震え始めていた。呼吸が乱れて、目尻に涙がたまる。

「やめて、だめ……行っちゃだめ……」

男の眼前に立つと、父はもう１度質問した。

「私になにかーー」
「だめっ！」

父が言い終わらないうちに、私は叫び出していた。あの男が、隠していた杖を両親に向けたからだ。
男が短い呪文を唱えると同時に、父と母の体は家の奥へと吹っ飛んだ。
大きな音をたててリビングの壁が破れ、2人は寝室に放り出される。小さな私は絶句して、ただそれを見ていることしかできなかった。突然の展開に思考が追いつかなかったのだ。

「うぅ……」

体中に傷を作りながらも、両親はまだ生きていた。だが、男の方もそれは承知の上。最初から一撃で相手を殺すつもりはなかったらしい。
今なら分かるが、魔術で人の命を奪う事は、それほど簡単ではない。誰かを殺めることができる術というのは総じて高度な術で、それなりの魔力と難しい呪文が必要だ。
しかし、おそらくこの時の男は、それほど多くの魔力を持ってはいなかった。それに長い詠唱を始めれば、相手にこちらの意図を感づかれてしまうと思ったのだろう。それなりの攻撃力はあるものの特に高度ではない術ーー必要な魔力が少なく、唱えなければならない呪文も短い術を使用して、男は父と母の虚をついた。
そして歯を見せてにやりと笑うと、倒れている2人のもとへゆっくりと近づいていく。

「やめてよ……っ！」

そう訴えたのは現実の私。目をつぶったまま、ミカの上着をぎゅっと握りしめる。ミカは喉の奥で低く笑いながら、あやすように私の背中を撫でた。しかし脳内に流れる映像は止めてくれない。

男が上着の内側からナイフを取り出し、鞘を抜いた。まず、うつぶせに倒れている父の元に向かうと、一気にその鋭い刃を振り下ろしーー

「……っうう」

現実の私が嗚咽を漏らす。もう見ていられない。

両親が死んだあの日から、私はなるべく泣かないようにして過ごしてきた。泣いてる暇があるなら魔術を勉強して、黒魔術師を倒せるようになるのだと。

しかし今は、とてもじゃないけど耐えられない。記憶の中で父が息絶え、男のナイフは母に向けられた。

「嫌、いや……」

心にため込んでいた悲しみや苦しみが、涙となって溢れ出す。ミカが透き通った笑い声を上げながら、そのしずくを舐めとった。どうしてこんなことするの？

父と母は事切れた。男はいったんその場から離れると、奥の書斎へ向かった。真っ青な顔をした小さな私はキッチンで凍りついたまま動かない。ショック状態だったんだろうけど、今思えばそれでよかった。泣いたり悲鳴を上げたりしていれば、男が私の存在に気づき、きっと殺されていただろうから。

「どこだ？　どこにある」

書斎から、男の独り言が聞こえてきた。ばたばたと本が倒れる音、書類をあさっているような音も。

私には1時間にも2時間にも感じられたが、実際はほんの15分

ほどだったと思う。何かを探して書斎を荒らしていた男が、目当てのものを見つけて戻ってきた。手には日焼けした1枚の紙。
男は私のいるキッチンにはちらりとも視線をよこさず、父と母の遺体を引きずって家を出ていった。

幼い私はよろよろと立ち上がり、窓からそっと外を見た。男は書斎から取ってきた紙を見ながら、両親の体から流れ出る血で地面に何かを書いている。ー魔法陣だ。
今なら分かる。あれは悪魔を呼び出す召喚陣。
悪魔を召喚するためには、人間界と魔界を繋ぐための陣が必要なのだ。ちょっと怪しげな店を探せば、その図式は簡単に手に入る。
が、ほとんどは偽物。
しかし両親の持っていた文献の中には、本物があったようだ。男の狙いもそれだった。

召喚陣の完成とともに、男が呪文を唱える。すると地面の陣が黒い光を放ち、男の顔を不気味に照らした。

「やったぞ……！」

感動したように男が言う。
召喚陣から姿を現したのは、昆虫のイナゴのような顔を持つ悪魔だった。体のほうは人間と変わりなく、上等な背広を着ていて、紳士然とした雰囲気。
悪魔はその複眼の目でさっと辺りを見回した後、目の前の男を見据えて言った。

「契約するか？」

恋の病　08

「契約するか？」
「ああ、もちろん」

男は激しくうなづいた。悪魔の声はとても低く、ざらついている。

「悪魔と契約を交わす意味を分かっているか？　契約を交わすと、お前は俺に魂を差し出さなければならない」
「ああ、分かっている。だが、魂を差し出すのは私が寿命を迎えた後だろう？　死んだ後で私の魂がお前に喰われ、消えて無くなるのだとしても、どうでもいいさ。生きている今が全てだ。今、幸せならそれでいい」
「そうか」

そうして男と悪魔は契約を交わした。その証（あかし）として、男の胸に黒い華のような刻印が刻まれる。

「俺の魔力は、その刻印を通じてお前に送られる」

悪魔がそう教えると、男は瞳をギラつかせながら「試してみたい」とつぶやいた。悲劇の幕は、まだ降りていないのだ。

「俺の魔力を使いたいなら、対価を払ってもらう」
「対価？」　男が片眉をはね上げた。

「対価は私の魂だろう？　死んだ後でやると言っている」
「いや、それは契約の対価だ。悪魔の魔力を使うなら、それとは別

に対価を払わなければならない」
「何が欲しいんだ？」
イナゴの顔を持つ悪魔は、少し考えた後こう答えた。
「そうだな。人間の肝は美味いと聞いた。それが喰いたい」
「そんなもの対価として私に求めなくても、悪魔のお前なら簡単に手に入れられるんじゃないのか？　人を殺すことくらい、なんでもないだろう」
男が言うと、悪魔はゆるく首を振った。
「無理だな。人間と契約を交わした悪魔は、その契約主を含め、人間に手を出すことはできなくなる。だが、対価として貰った人間はその限りではない。だからお前が人間を捕まえて、対価として俺にくれ。そしたら勝手に肝をとって喰う」
「なるほど分かった。先に魔力を与えてくれれば、すぐに喰わせてやる」
「いいだろう」
小さな私はまばたきもせずに、家の中から男の行動を目で追った。やつは悪魔とともに少し離れた隣の家へと向かうと、その正面に立ち、杖を構えた。遠目でも口を動かして呪文を唱えているのが見て取れる。
杖の先に、よどんだ紫の光が集まってきた。それはだんだんと大きくなり、男の合図とともに勢いよくはじけた。
さっき両親を吹き飛ばした術とは、威力がケタ違いだ。木製の小さな家が、中にいた人間もろとも木っ端みじんに砕け散る。
小さな私は息をのみ、現実の私は歯を食いしばった。隣の家には、優しい中年の夫婦が住んでいた。よくヤギのミルクを分けてくれて、

私のこともとても可愛がってくれていた。

「素晴らしい！　素晴らしい力だっ！」

男の高笑いが、静かな村に響き渡る。

「おい、人間まで吹き飛んだじゃないか。これじゃあ肝が喰えない」

悪魔が不服そうに言う。

男は猟奇的な笑みを浮かべ、異常に興奮したような声でこう言い放った。

「心配するな。まだ人間はいる。私も新しい力をもっと試したいし、手始めにこの村を潰してしまおう」

家を吹き飛ばした音で、村に住む他の住民たちも何事かと外へ出てきた。男は笑い声を上げながらその人たちに近づいていきーー

「……っ……」

私はもう、声も出なかった。男が笑いながら村を壊滅させていく姿を、ただ見ていることしかできない。胃の辺りから何かがこみ上げてきて吐きそうになった。ミカはずっと背中や頭を撫でてくれていたけど、喉からは静かな笑い声が漏れている。

ほんの数分で村は壊滅した。

人、家、家畜。男はえり好みすることなく、全てを壊した。

家の残骸があたりに散らばり、その中にぽつぽつと赤い塊がみえる。よく一緒に遊んでいた男の子も、血にまみれて息絶えていた。

結婚間近だった近所のお姉さんとお兄さんも、強面(こわもて)だけど温和だっ

たおじいさんも、うちの母のお喋り相手だったおばさんも。
殺戮の間、男はずっと笑っていた。
彼こそ悪魔だ。人の皮をかぶった悪魔。

怒りに震える私の横で、小さな私はぴくりとも動かなかった。ただ目を見開いて、呆然と外を眺めている。これはきっと夢だ、と思っているに違いない。目の前で繰り広げられた光景はあまりに非現実的で、とてもすぐには受け入れられない。

新たに得た自分の力に満足した男は、最後まで高笑いを続けながら山を下りていった。口元を血で汚したイナゴの顔の悪魔も淡々とその後を追う。
そいつはうちの前を通り過ぎるとき、一瞬小さな私の方をじっと見つめたような気がした。黒魔術師となった男の方は自分の力に酔いしれていてこっちをちっとも見なかったけれど、悪魔の方は気づいていたのだろうか？

遠ざかっていく2人の”悪魔”を、小さな私は真っ黒な瞳で見つめていた。そこに映っているのはーー絶望の色だ。

頭の中に流れていた映像が止まっても、私はしばらく目をつぶっていた。体はだるく、疲弊している。心臓が止まってしまったような、空虚な気持ち。
涙のあとが残る私の頬をミカがかじっても、抵抗する気にならない。好きにすればいい。
そうしてしばらく、死んだようにぼーっとしていた。

「楽しかった？」

悲しみの炎が燃え尽きた後、私はどこかなげやりに、抑揚のない声で目の前の美しい男に聞いた。

「とても」

ミカが答える。

「久しぶりにお前の涙が見られて楽しかったよ」

「じゃあーー」

私はゆっくりと、閉じていたまぶたを上げた。濡れたまつ毛が冷たい。

「約束は守ってね。王子を襲った黒魔術師を倒すまで、対価なしで私に協力してくれるって話」

低い声で言う。何もかも燃え尽き、空っぽだった私の心に、ふつふつと新しい感情がわき上がってきた。両親と村の人たちを殺したあの男に対する、怒りと憎しみ。

もちろん、今までだって男のことは憎んでいた。だけどやっぱりその感情は、時とともに多少薄れていたのかもしれない。

しかし今回、ずっと思い出さないようにしてきた過去をミカに掘り返され、一から十までもう1度見せつけられて、私は男への憎悪を新たにした。

ーーあの男を許してはいけない。絶対に見つけ出して、仇を討つのだ。
そしてあの男以外の黒魔術師も、全員この手で倒してやる。何の感情もなく他人(ひと)の命を奪い、自分の欲望のまま魔術を使う黒魔術師なんて、この世からいなくなればいいのだ。

「絶対捕まえてやる」

強い決意を込めて言った。まずは王子を襲った黒魔術師だ。
と、その時。めずらしくミカが声を上げて笑いだした。私の顔をくいと上げ、じっと瞳を覗き込んでくる。

「憎しみに染まったお前の漆黒の瞳は、この世の何より美しい」

ミカの赤い瞳が、炎を映したようにゆらめく。

「私の可愛いクロエ。その怒りを忘れてはいけないよ」

両手で顔を包まれて、涙の残る目尻にキスを落とされた。ミカの唇は薄く、少しひんやりしている。
他のまっとうな人間ーー例えばエリク王子だったら、ミカが今言った事とは逆のことを言うだろう。「怒りや憎しみを抱き続けていても辛いだけだ。復讐なんて愚かな真似はやめろ」と。
それはもっともな意見だ。自分でも分かっている。優しかった両親は、こんなこと望んじゃいないって。

だけど私が耐えられない。黒魔術師が好き勝手やっているのに、何もしないでいるなんて。
それに、怒りや憎しみはどうしたって消えそうにない。
だからミカのように、「憎しみを持っていていい」と言ってもら

える方が楽なのだ。

「感謝してるよ、ミカ。あの男がどれだけひどい事をしたのか、私にもう1度思い出させてくれて」

うつむき、ミカの肩におでこをこつんと置きながら、そう呟いた。

＊＊＊

「え、またですか？」

隊長に声をかけられたのは、私が研究室の掃除をしていた時だった。

「私、おとといやったばかりですけど」

戸惑いながらそう答える。隊長は私に、また「夜の警備につけ」と言ってきたのだ。

一晩通しての警備はなかなか体力がいる。もちろん睡眠時間も少なくなるし。だから他の魔術師たちは、週に1度くらいの周期で”夜勤”にあたっているはずなのだが。

「ぐだぐだ文句を言うな。隊長（わたし）の決定は絶対だ」

尊大な態度で言うと、隊長はつかつかと研究室を出ていってしまった。

黒魔術師は絶対に捕まえてやる、と昨日決意を新たにしたばかり

だから夜の警備は別にいいのだけど、大変な仕事ばかり私に回すのはやめてほしいな。確か今日は隊長が夜勤のはずだった。自分が休みたいがために、その仕事を私に押し付けたのだろう。本当、嫌な上司だ。

心の中で隊長に毒を吐きながら、私は同じ部屋の中にいるスザンナの方をちらりと見た。自分の机に座って黙々と作業をしている。騎士団へ渡す傷薬を作っているのだろう。たまには彼女も真面目に仕事をするらしい。

以前はことあるごとにつっかかってきたスザンナだが、今は基本的に私を無視している。しかしたまに目が合うと、背筋も凍るような恐ろしい形相でこっちを睨んでくるのだ。

私を敵視している暇があったら、普段エリク王子の近くでお世話をしている侍女たちや、将来の妃候補と言われている上級貴族のお嬢様たちに嫉妬していたほうが有意義だと思うんだけどなぁ。

その日の晩、私は隊長から命令された通り、夜の警備にあたっていた。濃紺の空は晴れていて、月や星がはっきりと見える。静かでいい夜だ。いいのか悪いのか、今日も何も起こりそうにない。

犯人は結構、慎重なタイプのような気がする。最初の暗殺未遂から今まで全く姿を現さなかったことからしてもエリク王子の殺害は急ぎの用件ではないようだし、こうして警備を固めて待っていても、犯人はなかなかやって来ないんじゃないだろうか。

現在、夜の警備の人数は普段の2倍になっており、所によってーーエリク王子の寝室付近などーーは3倍の人員がつぎ込まれている。

しかしこれがずっと続くわけではない。安全が確認されしだい、

元の警備の人数に戻るわけで……
犯人はもちろん、そのタイミングを狙うだろう。私はだったらそうする。

「すみません、カレル副団長を見ませんでしたか？」

私と同じく城の外の警備に当たっていた魔術師に声をかけた。研究棟の中で見かけた事のある、確か第４か第５辺りの魔術師だ。
私より１０ばかり年上に見える彼女は、

「副団長はエリク王子につきっきりよ」

と教えてくれた。お礼を言ってその場を離れる。
魔術師団を統率する１番偉い人が団長。その下が副団長だ。さらにその下には各隊をまとめる隊長、副隊長がいて、私たち平隊員がいる。
つまりカレル副団長というのは、魔術師団のナンバー２の位置にいる人物である。私のような平隊員ではほとんど接する機会もないし、実際喋ったことなどなかった。入団式の時に皆の前で話している姿を見たことがあるだけ。

しかし私は今、その人に話したい事がある。本当はまずうちの隊長に話をして、隊長から交渉してもらった方がいいのだろうが、あの隊長が私のために動いてくれるとは思えないから、こうして自分で会いに行くしかないのだ。
果たして副団長が会ってくれるかは分からないけど。

城の中に入って、奥へ奥へと進む。
すると、廊下の途中で２人の騎士が立ちふさがっていた。ここから先は王族の居住区で、簡単には立ち入れないのだ。

「あの、すいません。魔術師団のカレル副団長に用があるのですが、通してもらえませんでしょうか」

体格のいい2人の騎士を見上げて、私は少しビビりながら声をかけた。

彼らは私の格好を確認するとーー王国魔術師が着ているローブには、ちゃんと国の紋章が入っているのだーー少し考えた後で、「ついて来い」とあごをしゃくった。1人はその場に残り、1人は奥へと歩いていったので、私も歩いていった方の騎士に続く。

彼との歩幅の違いに慌てつつ、小走りでしばらく進むと、なんだか見たことのある景色が目に入ってきた。この前来た、エリク王子の私室が近いのだ。

王子やカレル副団長がいるらしき部屋の扉の前には、また別の騎士が2人いた。私を案内してくれた騎士の人が、その騎士たちに小さな声で耳打ちする。「カレル副団長に用があるらしい」とかなんとか。

部屋の前にいる騎士は、私の方をちらりと見た後で扉に向き直り、上品に2度ノックをした。

「お話中失礼します。カレル副団長に用があると、魔術師が来ております」

扉の外からよく通る声でそう呼びかけると、中から「入って来い」と反応があった。エリク王子の声だ。

私はじゃっかん緊張しつつ、扉を開けて待っていてくれる騎士の横を通り過ぎ、王子の私室へと入っていった。少し心配したのだが、まだ夜も浅いのでエリク王子は起きていたようだ。

彼は中央に置かれたソファーに座っていたが、こちらを見た瞬間、

少しだけその目を見開いた。訪問者が私だった事に驚いたようだ。
同じく中央のソファーには、テーブルを挟み、王子と向かい合うようにしてカレル副団長が座っていた。艶のある灰色の髪を肩の辺りで切りそろえていて、細身の体は長いローブですっぽりと覆われている。整った顔に眼鏡をかけており、どこか冷たい印象だ。

「君は？」

その氷のような瞳が、鋭く私を射抜く。

「あ、あの私、第3隊に所属するクロエ・デュオラと申します。副団長にご相談したい事があるのですが、今よろしいでしょうか」

偉い人と話をするのは神経を使う。私はおどおどと相手の機嫌を伺った。
が、カレル副団長の機嫌はあまりよろしくないらしい。彼は厳しい視線を私に向けると、

「私に用があるのなら、また明日出直してきなさい。ここは王子の私室ですよ」

と言い放った。しかし注意されることは覚悟で来たので、それくらいではへこたれない。

「すいません。でも少し急ぎの用件で……」
「まぁいいじゃないか。とにかく座れよ、クロエ」

助け舟を出してくれたのはエリク王子だ。さすが。
カレル副団長がとがめるような視線を王子に向けたけれど、全く気にしていないみたい。立っている私を指し示し、副団長に言う。

「こいつがあの12年前に起きた虐殺事件の生き残りだ。この前話しただろ」
「ああ、彼女が」
私を見るカレル副団長の目に、少し憐憫の色が宿った。「氷の心を持っている」とか「感情がない」とか、影で様々なうわさがささやかれている副団長だけど、意外と優しいところもあるのかもしれない。
私は「失礼します」と断って、彼の隣に腰をおろした。

恋の病　０９

「で、カレルに話って？」

高そうなティーカップで紅茶を飲みながら、エリク王子が私に問う。

「えっと……エリク王子の暗殺未遂事件のことでちょっと。まだ犯人の目星はついていないんですよね？」

「それを君に教える必要はありませーー」

「ああ、全くついてない」

カレル副団長の言葉をさえぎって、エリク王子が教えてくれた。副団長は目をすがめたが、王子は「いいだろ、別に」と肩をすくめた。

２人のやりとりを気にせず、先を続ける。

「私、王子のお力になれないかと色々考えたんです。それでいい事を思いつきました」

「期待はしてないが、言ってみろ」

エリク王子がうながす。副団長も全然関心がないような様子で、紅茶をかき混ぜていた。

彼らから見れば、私はまだひよっこの新人魔術師。だから当然そういう反応にはなるだろう。半人前が出しゃばるな、と怒鳴られなかっただけマシだ。

私はひざに手を置いて、前に上半身を乗り出すようにして話した。

「このまま待っていても犯人の黒魔術師はやってきません。だから、罠をはって犯人をおびき寄せるんです。私に王子の影武者をさせて下さい」

「影武者？」

首をひねる王子に、私は自分が考えた作戦を伝えた。

影武者と言っても四六時中ではなく、犯人がやってくる可能性が高い夜の間だけのもの。魔術を使って私がエリク王子に変身し、王子の寝室で、王子の代わりに眠るのだ。

そうすれば、犯人がやってきても襲われるのは私。別の場所で眠る王子に危険は無い。

「いっそのこと犯人らしき人物を捕まえたとか言って、警備の数は元に戻した方がいいかもしれません。犯人が出てきやすいように。その上で私がおとりになります」

説明が終わると、エリク王子は険しい顔で、カレル副団長はびっくりしたような顔でこっちを見た。

「驚いた。なかなかいい作戦です」

副団長の言葉に、私は照れたように頬をゆるませた。

この作戦の是非を相談する相手として、カレル副団長を選んだのは正解だった。私が庶民出身でも新人でも、彼には関係ない。いい提案をすれば採用するし、悪ければ却下する。彼は実力主義者なのだ。

これがうちの隊長ならこうはいかない。あのヒゲオヤジは、私の提案を聞く耳なんて持っていないからだ。お前は掃除でもしてろと一蹴されて終わり。

柔軟に私の話を聞いてくれそうな相手として、魔術師団の団長も候補に入れていた。しかし団長はもう、よぼよぼのおじいちゃんでー昔は凄腕の魔術師として名を馳せたらしいけどー魔術師団団長という地位も名誉職みたいなものなのだ。実権を握り、魔術師たちをまとめているのは副団長の方。

エリク王子の警護の魔術師側の責任者もカレル副団長だ。だったら直接副団長に話をつけた方が早い。

直接、ということで言うなら、直接エリク王子だけにこの『おとり作戦』を話してもよかった。

しかし私の予想では、彼は絶対ーー

「駄目だ。俺は反対だ」

王子が厳しい声を出す。ほら、やっぱり。

「女をおとりに自分は安全な場所で寝るなんて……」

そう言って首を振る。王子は優しいのだ。

「エリク王子、私はただの女じゃないですよ。攻撃も防御もできる魔術師なんです。おとり役くらい、こなしてみせます。任せて下さい」

「王子、私もこの作戦を試してみたいと思っています」

カレル副団長も私に味方してくれた。

「現状、犯人も犯人の目的も分からず手詰まり状態ですから、なんとかこれを打開させたい。おとり役に危険はつきものですが、彼女もある程度は自衛できますし、もちろん私も彼女を守ります。みす

みす犯人に殺させるような事はしませんよ」

エリク王子はしばらく渋っていたが、最終的に副団長の説得に応じた。

王子も、早く犯人を捕まえなくてはならない事は分かっているのだ。王族を暗殺しようとした犯人を野放しにしたままでは国民も不安がるし、諸外国からもなめられてしまう。

「この作戦を教えるのは、ごく一部の人間に限定したほうがいいと思います。騎士や魔術師であっても、全員に教える必要はないかと」

私がそう言うと、カレル副団長もうなづいた。

「内部に犯人がいたり、密偵がいる可能性も捨てきれていませんし、悪気なく情報を外へ漏らしてしまうという事もありますからね。うわさ好きの軽率な者はどこにでもいます」

さっきから不機嫌になっている王子を無視して、副団長は作戦を詰めていった。

「作戦は明日からさっそく始めましょう。まず『王子を襲った犯人らしき人物を捕まえた』という情報を流し、その上で夜の警備の人数を減らし、厳戒態勢を解いたように見せかけます。犯人はきっとその隙をつくでしょうから、我々はエリク王子に成り済ましたクロエさんの元へ、のこのことやってくる犯人を待てばいい」

そこで勝利を確信したように唇の端を上げて笑うと、さらに続けた。

「作戦を伝えるのは、信頼のできる一部の騎士と魔術師、それに侍

女と……第一王子と国王にも伝えておいたほうがいいですね。もちろん全員に作戦を口外しないよう言わなければなりませんが。騎士団の警備責任者のほうには、私から説明しておきましょう。騎士たちもきっとこの作戦に乗り気になると思いますよ」

カレル副団長はそう言って、私に向かってほほ笑みかけた。珍しく役に立つ物を拾ってきた駄犬を褒める時に向けるような笑みだったけど、「氷の心を持っている」といわれるこの人でも笑うんだな、と私は感心していた。

エリク王子がじっとりとこちらを見つめながら言う。

「せめて誰か他の……クロエ以外の者におとりを頼めないか？　いつも俺についてくれてるセドリックって騎士なんかいいと思うけど。強いし。クロエはまだ新人だし、何か頼りないんだよな。殺されないか心配だ」

「エリク王子に心配してもらえるなんて光栄ですが、私のことは気にしないで下さい。こう見えて結構強いんですから。それに私は、黒魔術師を倒すために魔術師になったんです。おとり役はぜひ私にやらせて下さい」

私の強い想いが伝わったのか、エリク王子は諦めたように「わかった」とつぶやいた。

＊＊＊

そして次の日。

昼間の仕事中、研究室に入ってきた隊長が皆を集めて言った。

「エリク王子を襲った犯人が捕まったらしい。正確に言うとまだ証拠はそろっていないから、犯人ではなく容疑者だが」
「え、本当ですか？」

部屋にいた隊員たちは急な展開に驚いたようだが、しばらくすると皆「よかった」と胸を撫で下ろし始めた。
隊長は続ける。

「だがまぁ、そいつが犯人で間違いないだろうという事だ。今日から夜の警備も通常通りに戻すからな」
「犯人は誰だったんです？　エリク様を襲った不届き者は！」

スザンナが鋭い声を上げた。隣にいたダンが、なだめるように彼女の肩を撫でる。
私は密かにスザンナの反応を見ていたけど、警備が薄くなると分かってほくそ笑むとか、偽の犯人が捕まったことを鼻で笑うとか、そういう分かりやすい反応はしなかった。
本当にエリク王子を襲った犯人のことを怒っているように見えるが、うがった見方をすると演技にも見えてくる。

「容疑が固まるまで、犯人の名前は公表しないそうだ」

その口ぶりからすると、隊長は本気で容疑者が捕まったと思っているようだ。隊長クラスだと、もしかしたら全員に作戦が知らされているんじゃないかと思ったが違うらしい。
カレル副団長は昨日、『信頼のできる一部の騎士と魔術師』に作戦を知らせると言っていたが、そこにうちの隊長が入っていない事に、私は意地悪にも喜んでしまった。副団長は見る目があるな！

「クロエ」

なーんて事を考えていたので、突然隊長に名前を呼ばれて、私はびくりと飛び上がった。

「な、何でしょうか？」

「お前はこれから数日、この研究室には来なくていい。代わりにカレル副団長のところへ行ってこい。部屋を掃除してほしいそうだ」

「掃除ですか……」

私は、なるべく嫌そうにみえる顔を作った。

隊長がせせら笑う。

「魔術師を辞めて、いっそ掃除婦になったらどうだ？　くれぐれも副団長に失礼なことをしてくれるなよ」

「分かってます」

仏頂面でそう言うと、仕事に戻る仲間たちを尻目に、私は一人荷物をまとめて研究室を出ていった。しかし、向かうのはカレル副団長の部屋ではない。寮の自分の部屋だ。

実は、副団長からの呼び出しは周りをあざむくためのカモフラージュ。

今日の夜から私は王子の身代わりとなって王子の寝室で眠ることになるわけだが、本当に爆睡してしまっては、犯人がやって来た時に簡単に殺されてしまう。寝るのではなく、寝たフリをしないといけないのだ。

そのためには事前にしっかり睡眠をとっておく必要があるから、私は昼間の仕事を免除された。「昼は家に帰って寝るように」と、昨日副団長に言われたのだ。

これからしばらく、犯人が現れるまではこういう生活が続くだろう。

たっぷりと睡眠をとった後、日が完全に沈んだころに、私はエリク王子の寝室へと向かった。王子が話を付けてくれたのか、今回は廊下の途中で警備をしている騎士のところも、あっさりと通れた。

「本当にやるんだな？」

優美な調度品に彩られた無駄に広い部屋の中、天蓋付きのベッドの側に立っていた私はエリク王子に詰め寄られていた。もちろん、”おとり”を本当にやるんだな、という意味だろう。

「はい、頑張ります」

にっこりと笑って言うと、王子は軽くため息をついた。能天気な子供を見るような目でこっちを見てくる。失礼な。

「どうも頼りないんだよな、お前は」　そこまで言うとくるりと後ろを振り返って、

「クロエの事、ちゃんと守ってやってくれよ。任せたぞ」

同じ部屋の中にいた、数名の魔術師と騎士たちに向かって言った。彼らは今回の作戦の事を知らされた、精鋭部隊のようなもの。皆それなりの才能と戦闘経験を持った人たちで、この中にいると新米の私は浮いてしまう。

「大丈夫ですよ。それより、貴方様はご自分の心配をなさって下さい」

王子の隣に立っていたカレル副団長が、部屋の照明を受けて淡く光るグレーの髪を耳にかけながら言った。

そして私の方に向き直ると、

「さて、それでは君に変化(へんげ)の術をかけましょうか。自分で出来ますか？」

と、聞いてきた。私は困ったように眉を下げて、おとなしく首を横に振る。

自分自身に術をかけるのは難しいのだ。副団長もそれを分かった上で「自分で出来るか？」と聞いてきたのだろうし、ここは未熟な新人らしく、上司にお願いした方がいい。

この場でミカを頼るわけにはいかないんだし。

「では私がやりましょう。まず、これを飲み込んで下さい」

そう言ってカレル副団長が差し出してきたのは、金糸のような1本の髪の毛。きっとエリク王子のものだ。

変化の術を使う時は、姿を変える相手の体の一部を自分の体内に入れなくてはならないから。

でも、髪の毛って……

「1本でもきついですね」

「水で飲み込んでしまいなさい」

躊躇(ちゅうちょ)する私に、副団長が水の入ったグラスを渡してくれた。いや、水があっても確実に喉にひっかかるよ、これ。

顔をこわばらせて金色の髪の毛を見つめる私に、エリク王子が申し訳無さそうに言った。

「なんか悪いな。髪の毛食うなんて気持ち悪いだろ？　こっちのがマシなんじゃないか？」

腰に携えていた短剣を取ると、その刃先を自分の指に向ける。周りにいる騎士たちが止めようと身を乗り出してきたけど、その前にエリク王子は自分の指先を小さく切っていた。

ぷくりと溢れ出た1滴の血を、私が持っていたグラスに落とす。王子の血は水に溶けて透明になった。

「傷、大丈夫ですか？」

あわあわと恐縮しながら聞いた。王子に血を流させてしまうなんて。

「問題ない。……大丈夫だって！」

前半は私に、後半は魔術で傷を治しにかかったカレル副団長に向かって王子が言った。副団長の術によって、エリク王子の傷はあっという間になくなってしまう。

小さな傷を周りから過剰に心配されて、王子は少し恥ずかしそうだ。

笑ってしまいそうになるのをこらえて、私は一気にグラスの水をあおった。血の味は感じない。

「では術をかけますよ」

カレル副団長が杖をこちらに向けた。魔力をたたえて、先がぼう

っと光っている。
副団長が呪文を唱え始めると、私にも変化があらわれた。強い光に覆われて、体のあちこちがむずむずし始めたのだ。なんだかちょっと気持ち悪い感覚。
詠唱が進むにつれて私の体はだんだんと作り変わっていき、数十秒ののち、光が消え、呪文がやむと同時に変身も終わった。

「うわ……俺だ」

目の前に立っているエリク王子が微妙な表情をして言った。
さっきまで見上げていた彼と、今では視線の高さが同じだ。
向かいの壁にかかっている大きな鏡へ視線を向ける。輝く金の髪に青い瞳。中性的な格好良さを持ったエリク王子が2人、そこには映っていた。

「完璧ですね」

そう言った自分の喉からも、なめらかなエリク王子の声が出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1429x/

灰色の魔術師

2011年11月26日15時48分発行